Osaka University Knowledge Archive

Title	ファシズムへの偏流 : ジャック・ドリオとフランス人民党 (2)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2012, 62(2), p. 27-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57088
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ファシズムへの偏流

―ジャック・ドリオとフランス人民党―（2）

竹　岡　敬　温†

6. 権力のためのたたかい

1925年末から1926年初めにかけて，フランス共産党では党の方針をめぐって激しい対立が生まれた。1925年1月にクリシーで開かれた第4回全国大会は，前年夏に「ボルシェヴィキ化」のスローガンの下に執行委員会が採択した諸決定を追認していた。それは，ソヴィエト・モデルにもとづいてコミンテルン各国支部を改造すること，すなわち，それまでのように党員たちがかられの住居の場所に応じて集まって地方支部を組織するのではなくして，企業細胞を基礎にして党を再編成することであった。「ボルシェヴィキ化」によって期待されたのは，とくに労働者の世界に共産党を定着させる運動を強化することであり，工場細胞が労働者大衆のなかに党のスローガンを広め，逆に，企業内の労働者の生活とたたかいにとって有益な情報を党指導部に伝達することであった。また，「ボルシェヴィキ化」によって，社会民主主義の残存物，とりわけ選挙第一主義を根絶できるとおもわれたのであった。

しかし，党をあげての努力にもかかわらず，この「ボルシェヴィキ化」をめざす行動は期待通りの成果をもたらさず，多くの地方支部が消滅し，工場細胞は根を下ろさなかった。党員数は，1924年後半には，ややもち直したものの，5万人ないし5万5,000人にすぎず，1921年からみれば党員の半数を失っていた。これにたいして，同期間に，社会党（SFIO）の党員数は5万人から10万人にめざましく増加していた。

「ボルシェヴィキ化」という左への方向転換の責任者とみなされたのは，当時書記長のポストにあったアルベール・トランであった。1924年8月1日には，トランに代わってピエール・セマールが新書記長になっていたが，しかし，トランが党員数のもっとも多い「地域」，パリ地域の監督を強化したため，その結果，党内ではしだいに政治的な議論や説明は追放され，上層部の指示だけが尊重されて，「下部」はそれを機械的に実行しなければならなくなっていた。党内を息苦しい体制が支配し，しだいに不満が大きくなっていた[75)]。

2通の手紙がコミンテルン執行委員会に送付されたのは，この不満のあらわれであった。1925年2月9日付の最初の手紙には，80人の党員が署名していた。「250人の手紙」と呼ばれた1925年10月25日付の2通目の手紙は，共産党の官僚主義と党を「セクト的機能状態」に追い込んだ執行部のセクト主義を激しく糾弾していた。さらに，この手紙は1925年10月12日のゼネストを「ひどい大失敗であり，プロレタリアートと党にとって完全な敗北」であったとして，リフ軍との連帯関係の樹立とモロッコからの撤退というスローガンを「真の目

† 大阪大学名誉教授

75) J.-P. Brunet, *Histoire du PCF (1920-1982), op.cit.*, pp.33-36; Annie Kriegel, *Le pain et les roses, jalons pour une histoire des socialismes*, PUF, Paris, 1968, pp.189-190, 201, 203; Jules Humbert-Droz, *L'Œuil de Moscou à Paris (1922-1924)*, R. Julliard, coll.《Archives》, Paris, 1964, p.203.

的のない要求をエスカレートさせたもの」にすぎないと批判した。前書記長のトランも真っ向から個人攻撃をを受け，攻撃は間接的にドリオにも及んだ。執行部にいかなる責任も負っていなかったとはいえ，その仲間とみなされるほど，かれが前書記長に近かったからであった。

1926年1月中，政治局はさまざまな反対派を抑え込むことに専念した。ドリオは反対派にたいして開始されたたたかいに全力を傾けて参加し，1926年1月31日－2月6日の拡大中央委員会では反対派にかんする報告を提出して，満場一致で採択された。ドリオは，この報告で，反対派の過ちを繰り返し告発し，「250人の手紙」の送り主にたいして党指導部が開始した行動を支持した。こうして，1926年初頭には，反対派が急速に排除され，一方で党はその左翼急進主義の方針をわずかに修正していったが，そのような動きのなかでドリオはしだいに指導部の「期待の星」となっていった[76]。

ドリオは，トランや党執行部に協力しながらも，党内の個人的，政治的な対立を体験し，それに精通した。かれが党内地位の昇進の道を探りはじめたのは，おそらく，この頃からであったとおもわれるが，また，かれが共産党組織の束縛を認識しはじめたのも，この頃からであったろう。1921年にコミンテルンの書記に任命され，1922年以来，フランスにおけるコミンテルン常任代表になっていたジュール・アンベール・ドローズが，1925年春にドリオと交わした会話について，「わたしはかれに党執行部の政策に賛成するかと尋ねた。かれはいいえと答えた。わたしは，それではなぜ黙っているのかと尋ねたが，かれは“話せば政治局を出なければならない。わたしは政治局が変わるのを待っているのです”と答えた[77]」とその著書のなかで語っている。1923年夏以来，ソ連共産党とコミンテルンの影響力は強化され，フランス共産党はほとんど自動的にモスクワと同一歩調を取るようになっていたのであり，フランス共産党の他の幹部たちと同様，ドリオもまたソ連共産党の指導的グループの態度をそっくり模倣しなければならないことを完全に理解していたのである。

「ボルシェヴィキ化」をめぐる紛争は，実際には，ソ連共産党の党内抗争をコミンテルン各国支部の内部に持ち込んだ結果であった。1924年1月21日のレーニンの死後，スターリン，ジノヴィエフ，カメーネフによってつくられた「トロイカ体制」は，トロツキーを権力から排除し，この赤軍創立者（トロツキー）が国内各地とコミンテルン各国支部，とりわけフランス共産党内にもっていた影響力をなくそうという企てに着手し，各国共産党にたいしてトロツキズムの弾劾に協力するよう要求したのであった。アルベール・トランやフランス共産党執行部はすぐさまソ連共産党多数派に賛成したが，しかしながら，フランス共産党がコミンテルンの要求を受け入れ，モスクワの多数派の動向に従うまでには，一時期，党内で動揺がみられた[78]。しかし，党内の「左翼急進主義」分子は，「トロツキスト」として，しだいに押しつぶされていった。共産党青年部の書記長ドリオは，党執行部に協力しつつ，おそらく深刻な良心の呵責を感じることもなく，かれの最初の保護者であったトロツキーの立場を離れ，フランス共産党幹部の大部分と同様に，確信的なジノヴィエフ派になったようにおもわれる。コミンテルンの議長であったジノヴィエフは，すくなくとも外部からみれば，「トロイカ体制」の上位に立つ人物のようにおもわれたからであった。

しかしながら，レーニンの後継争いをめぐるソ連共産党内部の力関係は急速に変化した。

---

76) A. Ferrat, *op. cit.*, pp.168-181.

77) Jules Humbet-Droz, *Classe contre classe. La question française au IXe Exécutif et au VIe Congrès de l'IC*, Bureau d'Editions, Paris, 1929, p.247.

78) La JC dans la crise du Parti, *Bulletin communiste*, 2 mai 1924, p.437.

1924年秋には，「トロイカ体制」は崩壊しはじめ，スターリン・ブハーリン同盟が形成された。多数派を取り込んだスターリンは，策を弄して，ジノヴィエフとカメーネフがトロツキーを政治局から追い出したことに同意をあたえず，反対に，ジノヴィエフはスターリンを「半トロツキスト」と非難するまでになっていた。1925年9月には，ジノヴィエフは『レーニン主義』と題した大著をあらわし，トロツキズムを非難したのち，1921年にレーニンによって決定された新経済政策（ネップ）から利益をえた多数の商人や職人――新しいプチ・ブルジョワたち――，とりわけ農村において地位を強化してきた新しい富農層（クラーク）がソヴィエト政権にとって危険な存在になっていることを強調した。論争は激しさを加え，組織の危機を招くほど広がり，ジノヴィエフが第1書記をつとめていたレーニングラード地区が中央委員会の多数派と対立した。

1925年12月18－31日のソ連共産党第14回大会で「新しい反対派」は制圧され，スターリンの主張が90パーセント近い支持をえて勝利した。ソ連共産党書記長スターリンは，ただちに，ジノヴィエフがコミンテルン各国支部でもっていたすべての支持を堀り崩そうと懸命になり，1926年2月17日－3月15日に開催されたコミンテルン拡大執行委員会では，あらかじめ，各国代表の大部分を味方につけた。同委員会ではアルベール・トランがほとんど留保なしにソ連共産党への「帰属」を表明し，コミンテルン最高会議幹部会のメンバーに再選され，ドリオもスターリンを支持し[79]，「スターリンの熱烈な崇拝者[80]」となった。モスクワ滞在中，ドリオは，スターリンに好印象をあたえたようであり，クレムリンでの内輪の晩餐会に招待された[81]。

ジノヴィエフとカメーネフの敗北は，1926年10月26日から11月3日にかけて開催されたソ連共産党第15回大会，ついで同年12月のコミンテルン執行委員会で決定的となり[82]，コミンテルン各国支部では，反対派のリーダーとその公然たる支持者たちは除名処分を受けた。ドリオがスターリンの路線に賛成せずにはおれなかったのは，かれが野心家であるだけでなく利口でもあったからであろう。

ドリオは，スターリンとの異例な個人的接触という栄光に飾られて，1926年3月末，フランスに帰国した。コミンテルン執行委員会は，フランス共産党について，同党が「ボルシェヴィキ化の道への巨大な一歩を踏み出した」が，しかし，ロシア，ドイツ，イタリアの党のようには「内戦の試錬を受けてはいず」，つねに「合法的な体制の下で生きてきたために，その政治的経験はきわめて限られ，その大衆運動は，せいぜい警官との衝突にしかいたりつかないストライキか大衆デモに終わっている・・・党は手探りでその戦術の方針を練り上げるようにしなければならない[83]」との見解を表明していた。けれども，ドリオの直接行動主義は批判されず，むしろ反対に模範として提示された。

しかしながら，共産党青年部の同僚アンリ・バルベが，その回想録のなかで，この頃のドリオの精神状態にみられた変化のきざしについて

---

79) D. Wolf, *op. cit*., pp.56-59, 平瀬・吉田訳, pp.61-63, 66; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit*., pp.71-75.

80) Ruth Fischer, *Stalin und die deutsche Kommunismus*, Verlag der Frankfurter Hefte, Frankfurt, 1950, p.677, cit. par D. Wolf, *ibid*., p.59, 平瀬・吉田訳, pp.66.

81) D. Wolf, *ibid*., p.59-60, 平瀬・吉田訳, pp.63, 66-67; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit*., pp.75-76.

82) ソ連共産党およびコミンテルンの内部抗争については，*The Communist International 1919-1943*, Documents selected and edited by Jane Degras, Ⅱ, pp.287, 572sq.; Pierre Broué, *Le parti bolchevique*, Les Editions de Minuit, Paris, 1963, pp.218-252; Le PCF et la question russe 1926, dossier présenté par Jean-Marc Gayman et Danielle Tartakowsky, *Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez*, 1978, no. 25-26, pp.72-76.

83) Ibid. presenté par J. -M. Gayman et D. Tartakowsky, p.76;*Cahiers du bolchevisme*, no. 47, 15 avril 1926.

語っている。バルベは，ドリオを理想主義的で無私な「ボルシェヴィキの修道僧」から実際的で打算的な「組織の人間」に変えた変化は，1925年末頃に始まったとのべている。そして，ドリオの気持の動揺はフランス共産党の他の幹部たちの態度にたいする失望が原因であったといい，「かれは党の他の幹部たちが，かれを孤立させようとするだけでなく，かれをこっそりと中傷しながらも，その反面で，かれの行動を利用するすべを心得ていることに気づきはじめた。他の幹部たちの卑劣さ，用心深さ，偽善的態度が，ドリオの深い失望と同時に深い精神的危機の始まりの原因となった最初の亀裂であった。1925年末には，わたしは，はっきりと，かれの心のなかに，けっしてかれと行動を共にしようとはしない幹部たちにたいする軽蔑が明白にあらわれつつあったことを感じていた。それらの幹部とは，とくにセマールとトレーズであった[84]」と書いている。

しかし，そのような失望にもかかわらず，ドリオは，党指導部に近づくために，陰謀と策略のただなかに飛び込んでいったのである。ジュール・アンベール・ドローズが妻に宛てた私信のなかで，リールでの全国大会を目前に控えた1926年6月初め頃のフランス共産党は，かれの目には，各幹部たちが，なによりも，自分の縄張りを広げ，自分が書記長のポストにつくことができるように，ピエール・セマールに誤りを犯させようとけしかけることに懸命になっていて，まるで，まったく異質な要素からなる組織のようにみえると不満をいい，「実のところ，このいかがわしい小細工とこれらの陰謀のすべてに，わたしは心底からうんざりしている[85]」と告白している。

ドリオの党内における地位昇進の重要な段階となったのは，1926年6月20日－26日にリールで開催されたフランス共産党第5回全国大会[86]であったようにおもわれる。リールの競馬場における開会集会のとき，反植民地戦争のたたかいの総括を担当したのはドリオであった。モロッコ戦争は，1926年5月26日にアブデル・クリムが投降するというフランス共産党にとっては不満な結果とともに終わっていたが，ドリオは，党の反軍国主義的行動にはいくつかの弱点があったけれども，社会党（SFIO）の有害な態度とはちがって，全体として積極的で前向きのキャンペーンを展開したとして，批判を退けた。さらに，翌日の6月21日には，書記長ピエール・セマールの報告にたいする――ロ・エ・ギャロンヌ県選出の下院議員で農業問題の専門家ルノー・ジャンやアンドレ・マルティなど古参幹部たちの――質疑に「執行部の名において[87]」答弁し，「友情を込めて」反論したのはドリオであった。さらに6月25日には，ドリオは，外交政策の分野にかんする前書記長アルベール・トランの質疑に答えるために発言し，きわめて多様な能力を示して，出席者を驚かせた。

大会が終わって，新しい政治局の13人のメンバーが指名された。新しい指導者たちの紹介順序はそれぞれのもつ影響力をあらわしていたが，ジャック・ドリオの名はピエール・セマール，ジャン・ルイ・クレメ，マルセル・キャシャン，モーリス・トレーズの後につづいてリストの5番目にあげられた。セマールはなおモスクワの支持を受けて党の書記長としてとどまり，クレメは，すこしまえまではジノヴィエフの熱烈な支持者であったが，1924年1月のリヨンでの大会のあと党の副書記長に任命され，その後，この役職は廃止されたけれども，セ

84) H. Barbé, *op. cit*., p.69.

85) Jules Humbert-Droz, *De Lénine à Staline, Dix ans au service de l'Internationale communiste, 1921-1931*, La Baconnière, Neuchâtel, 1971, pp.268-271.

86) Compte rendu sténographique des débats du *Ve Congrès du Parti communiste français, tenu à Lille du 20 au 26 juin 1926*.

87) *L'Humanité*, 22 juin 1926.

マールの補佐役とみなされていた。キャシャンは，その「中道主義的」傾向をいつも非難されていたが，それまで党が経験してきたすべての試練を乗り越えて，モスクワに忠実にとどまりつづけた古参幹部であった。かれらについては，不満はなかった。しかし，トレーズが自分より上位であるのは，ドリオにはきわめて耐えがたいことであったにちがいない。トレーズはドリオよりも2歳若く，前年まではまだ公には知られていず，トレーズがモロッコ戦争反対行動委員会の責任者として指名されたとはいえ，実際には，その活動をリードしたのはドリオであり，トレーズは，フランス共産党のためにもコミンテルンのためにも，ドリオの10分の1も貢献していなかったからである。そのトレーズがドリオよりも先に指名されたことは，おそらく共産党青年部の血気さかんな指導者ドリオにたいするなにがしかの警戒心のあらわれであったのであろう。

ドリオの心にトレーズにたいする激しい対抗意識が芽生えたのは，まさしく，このときからであった。フランス共産党の多くの党員や幹部たちの目には，リールの大会が「ドリオとかれのグループ」の勝利とうつったにもかかわらず，このときドリオが味わった失望は，バルベの意見によれば，それまで党指導部のまわりに仕組まれる陰謀にほとんど興味をもたなかったかれの懐疑心を強めたのであった[88]。

けれども，その数か月後，「ロシア問題」に当てられた1926年9月1－3日の党中央委員会の会議録[89]を読めば，執行部内部におけるドリオの立場がきわめて強かったことが確認される。セマールによって提出された報告をめぐって長時間の討議がおこなわれたが，議論を方向づけたのは，党書記長よりもドリオであった。多くの質疑応答のあと，最後に政治局を代表してドリオが発言したが，それは討論を総括するためよりも，「ロシア問題」についての執行部の分析を提示し，決議文を提案するためであった。反対1票と保留2票のほとんど全員一致で採択されたこの決議文は，「中央委員会は，ソ連共産党に課せられた諸問題の本質について態度を明確にするまえに，なお若干の資料が必要であると考える」とのべて形式的にはなお譲歩しながらも，そのすぐ後で「ソ連共産党の一体性は，ロシアにおけるプロレタリア政権の維持と世界革命の勝利の絶対的な保証である」ことを再確認し，したがって，「ソ連共産党によってとられた懲戒処分」に賛成するとして，「フランス共産党中央委員会は，ソ連共産党によってジノヴィエフに制裁が科された結果として，かれがコミンテルン議長の地位にとどまるのは疑問であることを付言する」と結論していた。要するに，フランス共産党は，ソ連共産党内の抗争に勝利したスターリン派に全面的に歩調を合わせたのであった。

このように，ドリオは，フランス共産党の書記長ではなかったにもかかわらず，あたかも党の責任者であるかのように――たぶん書記長のセマールに協力してであったろうが――ふるまうことができた。ところが，この会議の半月前の1926年8月14日，サン・ドニで開催された共産党青年部第5回全大会で，ドリオは同組織の名誉議長に選出されていた。それは，ドリオが以後この青年部の組織の仕事に直接には関与できないことを意味していた。この決定はおそらくかれの不意を突いた出来事であったとおもわれるが，しかし，そのことでかれが痛手を受けた気配はなかった。それは，かれがすでに党内で思い通りに行動できるに十分なだけ強い立場にあることを自覚していたからであったろう。ドリオが青年部の仕事から事実上外されたのは，おそらく，年齢の問題（ドリオは28歳近くになっていた），コミンテルンの意志，かれがフランス共産党内で獲得した新しい立場，

---

88) H. Barbé, *op. cit*., p.73.

89) *Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez*, 1978, no. 25-26, pp.80-132.

さらには，かれの地位を奪おうとしたアンリ・バルベら若い野心家たちの存在など，多くの理由があったであろう[90]。

1926年はドリオがフランス共産党の最高権力の座に大きく近づいた年であったが，しかしながら，近い将来，かれが党の書記長に任命されるという可能性はまだ見えていなかった。ドリオはすでに若い熱狂的理想主義者の幻想を失ってはいたが，かれはソ連共産党，コミンテルン，そのフランス支部内の力関係を正確に感知できるようになっていた。いまや，すべてがスターリンの意志によって進もうとしていた。しかし，スターリンはまだ万能ではなく，かれはその権力を強化し，競争者を蹴落とすためのたたかいのさなかにあり，それには各国共産党の支持が必要であった。スターリンを批判しようとはしなかったフランス支部の内部では，ドリオは，スターリンにとっては，従順で目立たないセマールやトレーズよりもはるかに目立った多少厄介な存在であり，また，おそらくその能力からみてまだ正当な職務についてはいない人物のようにおもわれたのではなかろうか。いずれにせよ，1926年11月半ば，ドリオがコミンテルン第7回執行委員会総会に参加するためにモスクワを訪れたとき，スターリンは「中国への派遣」という思いがけない贈り物を用意していたのである。

7. 動揺

1926年11月にドリオがモスクワに到着したとき，スターリンと反対派との抗争は決定的段階に突入していた。コミンテルン執行委員会総会で議論された主要な問題は，「中国問題」であった。分裂し無政府状態に陥っていた広大な中国は，ロシアの共産主義革命を引き継ぐ最重要な土地であるとおもわれていた。

スターリンは，ブハーリンの「中国における階級の融合」理論に固執していた。その理論によれば，都市と農村のプロレタリアートは，民族精神をもつブルジョワジーと同盟し，西洋帝国主義に立ち向かうべきであった。中国国民党は，この同盟を接合させる役割を果たすべきであり，この「民族社会主義」の指導者の役割を担うと考えられたのが蒋介石将軍であった。これとは反対に，トロツキーは，ブルジョワ分子と労働者および農民とのいっさいの協力に反対であるとの意見を表明していた。かれによれば，中国のブルジョワジーは西洋帝国主義と断ちがたい同盟関係を結び，かれらの利害が革命的共産主義者のそれと両立するはずはなかった[91]。

ドリオがモスクワに着いたとき，一方でモスクワおよび中国共産党と他方で国民党指導部とのあいだでは，深刻な緊張が広がっていた。「階級融和」理論は，実際には，誤解にもとづいていた。中国では，多くの知識人とブルジョワたちは，根本的な農業改革と生産手段の国有化を拒否し，ひたすら民族主義的目的を追求し，ただ，国の財産を中国人の手に移すことだけを考えていた。1926年3月20日以後には，労働組合や農民連合の運動のいちじるしい発展に不安を感じていたブルジョワ階級の支持を頼みにした蒋介石は，中国共産党の幹部たちを逮捕し，共産党員を国民党指導部から排除し，ソ連顧問団の本国への送還を要求していた。ついで，同年夏には，北方の軍閥勢力にたいする当時「北伐」と呼ばれた攻撃に勝利したあと，蒋介石は，愛国主義の名において，ストライキとあらゆる形態の労働者の騒擾行為を禁止した。

それにもかかわらず，コミンテルンは，蒋介石と絶縁するべきではないと考えて，かれの要求を承認するという指令を伝えていた。スター

[90] D. Wolf, *op. cit*., p.61, 平瀬・吉田訳, pp.63-64; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, *op. cit*., p.82.

[91] D. Wolf, *ibid*., p.62, 平瀬・吉田訳, p.68.

リンはしきりに蒋介石を賞賛し，ブハーリンは労働者，農民の協力をえて軍閥を倒した蒋介石の軍隊，北伐軍の進撃を「革命的過程の特殊な形態」と呼んだ。スターリンとその支持者たちは，かれらの中国政策の失敗を認めようとはせず，中国問題にかんしてトロツキーと反対派が自分たちを苦境に立たせるのを防ぐために，この失敗を隠しおおそうとして，中国からくる情報の封鎖を命じた[92]。

スターリンが中国に「国際労働者代表団」を派遣しようと決意したのは，コミンテルン執行委員会拡大総会の会期中であった。ジャック・ドリオは，アメリカ共産党幹部アール・ブラウダー，イギリスの共産主義の労働組合運動家トム・マンらとともに，この代表団のもっとも著名な人物であった。代表団の公式的使命は，中国共産党と国民党との同盟にもとづいて展開されていた中国の革命運動に，コミンテルンと欧米の共産党との支持と連帯をもたらすことであった。数週間を宣伝活動の実習についやした後，ドリオとその仲間たちはシベリア横断鉄道でウラジオストックまでいき，1927 年 2 月 17 日には広東省に到着し，当時，広州に置かれていた国民党臨時政府のメンバーに紹介され，ついで黄埔の陸軍軍官学校を訪問した。かれらは多数の労働者や農民を集めた集会で演説をおこない，ドリオによれば，香港では 1 万人の労働者が出席し，広東省では 3 万人の農民が集まったという。

1927 年 3 月 6 日，代表団のメンバーは，蒋介石の軍隊と揚子江沿いにある漢口に移動するために北上した国民党政府のあとを追って広州を去った。広州では，国民党幹部たちは，代表団にたいして，つとめて国民党右派と共産党との関係の悪化を隠そうとしていたが，江西省を通過したとき，代表団は広州とは違った空気を感じた。江西省の国民党指導者たちは一貫して共産党の勢力を弱めようとしていたし，それどころか，大都市では，共産党や労働組合の幹部たちが殺害されていた。上海では，蜂起した労働者たちが北方軍閥の軍隊の残党を追い払い，上海市の鍵を国民党の軍隊に引き渡したあと，蒋介石は公然と共産党員の排除計画を準備していた。

代表団の中国滞在は，中国共産党が軍隊の指導権を蒋介石らの国民党に握られ，その軍隊によって革命運動がうちこわされ，共産党が苦境に立たされた時期と一致していて，代表団の使命は全面的な失敗に終わった。しかし，代表団のメンバーの大部分は，まだ蒋介石の軍隊によって占領されていない地域の中国共産党とコミンテルンにたいしてなんら警戒を促そうともせず，「沈黙の陰謀[93]」と呼ばれるようになる態度をかたくなに守って，口をつぐみ，スターリンの政策が疑われることはなかった。1927 年 3 月 31 日，それまで何度も小グループに分かれて行動していた代表団は，新しい首都となった漢口で合流した。クレムリンでは，中国情勢の話題はタブーになり，4 月 9 日，モスクワに宛てたブラウダー，ドリオ，マンの報告は，見せかけの楽天主義をよそおい，蒋介石の「革命的軍隊」と「大衆的組織」が協力の成果をあげていることを強調していた。

けれども，そのすこしまえの 3 月 17 日に，上海からコミンテルン執行委員会宛てに送られた 1 通の手紙のなかで，代表団の他の 3 人のメンバーが，中国共産党内に「党を右の方に，邪魔者たちを抹殺しようとする道へ」，すなわち蒋介石と国民党の方へ執拗に押しやろうとしているグループが存在していることを非難し，

[92] Harold R. Isaacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution*, Stanford University Press, Stanford, 1951, 2nd edition, pp.89-112; P. Broué, *op. cit*., pp.252-255; *La question chinoise dans l'Internationale Communiste* (textes présentés et rassemblés par Pierre Broué) ; Jean Chesneaux, *Histoire générale du socialisme*, Ⅲ *1918 à 1945*, PUF, 1977, pp.641-642; D. Wolf, *ibid*., pp.62-63, 平瀬・吉田訳, pp.68-69.

[93] D. Wolf, *ibid*., p.63, 平瀬・吉田訳, p.69.

「このグループとかれらの政治方針を支持しているコミンテルンの代表者」に疑いの目を向けていた。それはスターリンの姿勢を批判し，トロツキーが強力に主張していたテーゼの正当性を示すものであった。しかし，コミンテルン執行部はこの報告をもみ消すために，最大の努力を払ったのであった[94]。

1927年4月11日，蒋介石の軍隊は突然，上海に突入し，蒋介石の命令で労働者武装隊は武装解除され，翌12日には共産党員にたいする一斉検挙がおこなわれた。逮捕された共産党員の多くは，裁判もなく銃殺された。つづいて，その3日後，蒋介石は，漢口に国民党左派の政府を残したまま，かれ自身の政府を南京に設立した。南京や抗州等でもはげしい「赤狩り」がおこなわれ，労働組合も閉鎖された[95]。4月13日以降，コミンテルン代表団は，「丁重な」言葉で，国民党内部の分裂の危険について蒋介石の注意を促し，南京の右派政府設立に反対の態度をあきらかにした。上海の惨劇から10日後の4月22日になって，はじめてコミンテルンはその見解を表明し，蒋介石の不正な手口を激しく非難し，かれの部下たちを「反革命の兵士」，「共産主義の不具載天の敵」と呼んだ[96]。

このため，代表団は，4月末に漢口で開かれた中国共産党の大会に出席して，共産党の代表3人が加わっている漢口の「左派」政府を支持するよう決議させた。しかし，7月半ばには，共産党閣僚は政府から追い出され，12月11日，モスクワの指令によって共産党員たちが広州で引き起こした反乱を蒋介石は流血によって鎮圧し[97]，1927年末には，毛沢東を含む共産党の主要幹部たちは逃亡し，国民党左派と漢口政府は，蒋介石らの反革命派によって消滅させられた。蒋介石の下での中国の急速な統合とともに，スターリンの中国政策は完全に失敗した。

まだあまり工業化していない広大な農業国であった中国の革命運動は，農民の革命にたいする要求がきわめて強かったにもかかわらず，都市をたたかいの主要な場であるとみなしていたために，そして，中国共産党の農業政策が確立されていなかったがために，「民族主義的」ブルジョワたちとの不確かな妥協を追求するしかなかったのである。それでもやはり，中国政策においてスターリンの犯した誤りは大きく，ドリオは一度は仲間とともに嘘の報告をしたけれども，内心はひどく動揺していたにちがいない。フランスに帰国後，ドリオは「中国革命横断記」という題で25の論稿を書き，1927年6月25日から8月13日までの『ユマニテ』紙に発表した。それらは中国の状況の理論的な分析というよりは月並みな印象記であり，ロシア語にも飜訳されたが，結局，ロシアでは公表されなかった[98]。

1927年5月初め，国際労働者代表団は帰還の途についた。広州，ウラジオストックを経由して，5月中頃にモスクワに戻ったドリオは，コミンテルン執行委員会総会に出席したが，そこでは「中国問題」は「沈黙の陰謀」の対象であった。軌道に乗りかけていた反対派の排除がまだ最終的に宣告されてはいず，スターリンとブハーリンがかれらの政策の失敗を隠そうとしていたからである。この総会に出席していたイ

---

94) P. Broué, *La question chinoise dans l'Internationale Communiste, op. cit.*, pp.85-113.

95) 岩村三千夫・野原四郎『中国現代史』（改訂版），岩波新書，1954年, pp.88-101.

96) D. Wolf, *op. cit.*, p.66, 平瀬・吉田訳, p.71; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme , op. cit.*, p.89.

97) ジュール・アンベール・ドローズは，この反乱を仕立てあげた責任者のひとりにドリオの名をあげているが，このときドリオはすでにフランスに帰国していた。J. Humbert-Droz, *De Lénine à Staline, Dix ans au service de l'Internationale communiste, 1921-1931, op. cit.*, pp.307-308; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.510, note(5).

98) Jacques Doriot, *A travers la Révolution chinoise*, *L'Humanité*, vingt-cinq articles du 25 juin au 13 août 1927; D. Wolf, *op. cit.*, p.68, 平瀬・吉田訳, p.73; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot, Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.87.

タリア共産党のイグナツィオ・シローネの証言によれば，ドリオは，「数人の友人とわたしに，極東におけるコミンテルンとロシア政府の失敗の憂慮すべき状態を話してくれた。しかし，翌日の執行委員会総会で話したときには，かれはまったく反対のことを主張した。われわれは，唖然としながら，かれの話を聞いた。会議後，かれは，われわれに向かって，尊大な人間のように苦笑しながら，“まったくの政治的知恵から出た行動だよ”と説明した[99]。」この証言は，ドリオがその信念，とりわけクレムリンの指導者たちへの信頼において深刻に動揺していたことを示している。しかし，それはまた，ドリオがその疑念を自分のなかにしまいこみ，無意識の闇のなかに押し殺してしまうことができなかったことを示している。コミンテルン執行委員会総会への出席を終えてパリに戻ってきたときには，ドリオはモスクワの指導者たちの不謬性にたいする揺るがぬ信仰をもはやもってはいなかったとおもわれる。

パリに戻ったドリオは，中国旅行のためにかれがパリを離れていた8か月間にフランス共産党内に起きていた変化――かれの支持グループの衰退と党指導部内でのかれの孤立化――に気づき，苦々しい思いをしなければならなかった[100]。他方，ソ連共産党内では，1927年夏に，反対派を排除する過程が始まり，9月末にトロツキーとジノヴィエフはコミンテルン執行委員会から追放され，11月15日にはソ連共産党から除名された。

1927年6月前半にドリオがパリに戻ってきたとき，もうひとつの悪い出来事がかれを待ち構えていた。1927年4月22日，（第4次）ポワンカレ内閣の内相アルベール・サローが，アルジェリアのコンスタンティーヌでおこなった演説のなかで，「植民地の反乱，植民地の喪失あるいは放棄は，フランス失墜計画の最重要項目のひとつである」と言明し，「共産主義こそ敵だ」と叫んで，フランス共産党の反軍国主義と反植民地主義の宣伝を激しく告発した。ただちに弾圧が始まり，弾圧は何年も続いた。共産党の新聞は発行停止にされ，集会は禁止され，デモは容赦なく追い散らされた。多数の党員，幹部，報道関係の記者が逮捕され，国家安全侵犯罪あるいは軍人不服従教唆罪で有罪判決を受けた。ドリオ自身には，軍人不服従教唆罪で，中国滞在中の5月10日の欠席裁判で，パリの控訴院によって13か月の禁錮刑と3,000フランの罰金刑が宣告されていた。政府は下院にたいしてドリオ，ヴァイアン・クーチュリエ，デュクロらの共産党議員を対象とした議員不逮捕特権の取り消しを申し立てた。この件で開かれた下院の委員会は，長期間言い逃れに終始していた。しかし，最後には，ドリオ以外の議員たちにかんしては否定的意見を通告したが，ドリオにかんしては肯定的回答をおこなった[101]。

この間に，ドリオはいくつかの集会に，とくに共産党が6月25－28日にサン・ドニで開催した全国会議に参加することができた。この会議では数人の出席者が，「ロシア問題」にかんして，ソ連共産党内の反対派の文書が公開されていないことに不満をのべたが，ドリオは多数派を代表して発言し，その結果，ソ連共産党内の反対派とたたかうことを承認する決議が反対2票，棄権1票のほとんど全員一致で採択された[102]。このときもまだ，ドリオは多数派を支

99) Ignazio Silone, *Le Dieu des Ténèbres*, Calmann-Lévy, Paris, 1950, p.109; Ignazio Silone, *Sortie de secours*, Del Duca, 1966, p.94; D. Wolf, *ibid*., p.67, 平瀬・吉田訳, p.72; Philippe Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery, 1933-1945*, Editions du Seuil, Paris, 1986, p.53.

100) D. Wolf, *ibid*., p.68, 平瀬・吉田訳, p.73.

101) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1; *L'Humanité*, 17 juin 1927; J. Fauvet, *op. cit*., Ⅰ, p.76.

102) J. Degras ed., *The Communist International 1919-1943, op. cit*., Ⅱ, p.429; *Archives Nationales*, F^7 13100, dossier《communisme》, 1928, notes《poltiques générales》, note du 22 mars 1928.

持して，スターリンに忠実にとどまったのである。

1927年7月18日，ドリオはついに逮捕され，議会再開の日の11月3日まで拘禁された。議会再開とともに出獄できたのは，議員が服する禁錮刑は会期中停止されなければならないという下院の規定があったからである。しかし，出獄後すぐにドリオはあらたな裁判を受け，反軍国主義的宣伝活動の罪で12か月の禁錮刑が宣告された。1927年秋の国会の会期終了後，ドリオは，同僚の多くの共産党議員とともに姿を消して，警察の目をくらませた。1928年1月12日，新しい会期が始まった最初の日，会期中の議員の不逮捕特権が自動的に適用されるかどうか，あるいは政府は有罪を宣告された議員を拘禁させることができるかどうかについて長時間の討論の末，ポワンカレ首相と急進党閣僚のエリオ（文相）からの強い圧力もあって，下院は不逮捕特権を認めないという結論を下した[103]。キャシャンとヴァイアン・クーチュリエが最初に逮捕されたが，その後も，ドリオは地下に潜って警察を手玉にとりつづけた。

この間，ドリオにたいする訴訟は続けられ，1927年11月28日，軽罪裁判所は，かれにたいして，共産党青年部の機関紙『前衛』の発行責任者として，出版法違反の罪と軍人不服従教唆罪で1年の禁錮刑と1,000フランの罰金刑を言い渡し，ついで1928年2月28日には，刑を加重して，3年の禁錮刑と3,000フランの罰金刑の判決を下した。この判決に逆らって，ドリオは，そのままでは免れえない懲役刑を避けるために，もう一度，国会議員選挙を利用しようとし，1928年4月の国会議員選挙で「恩赦候補」として登場し，サン・ドニの選挙集会に姿をみせ，リールやヴァランシエンヌでも集会をリードした。しかし，4月19日，ヴァランシエンヌでの集会が終わったあと，とうとう逮捕されて，ラ・サンテ刑務所に送られた。ちょうど，コミンテルン第6回大会に出席するためにモスクワに出発しようとしていたときであった[104]。

ドリオは，中国滞在中の1927年5月10日の欠席裁判で判決を受けた13か月の禁錮刑（かれはそのうちの3か月と16日を終えただけであった）の残りをつとめあげねばならなかった。さらに，他の有罪判決（1927年11月28日と1928年2月28日の軽罪裁判所の判決）がつけくわわるおそれがあった。これらの判決にたいしてドリオは控訴したが，控訴審が迅速に進んだとしても，かれがすぐに釈放される見込みはなかった。1928年4－8月の警察報告[105]が，拘禁がいつまで続くのか，長すぎるのではないかと不平をいって，「不確かな自分の運命にいらだつ」ドリオの姿や，獄中生活ですっかり落ち込んだキャシャンの様子を伝えている。

この1927年から1928年にかけての拘禁生活の期間，ドリオは中国でのかれの冒険とコミンテルンの政策について種々思いをめぐらしたにちがいない。また，コミンテルンがフランス共産党に押しつけてきた新しい方針，極左的傾向への路線転換についても自問したにちがいない。

コミンテルンの新しい指令は，1927年夏の終わりに，モーリス・トレーズによってモスクワから持ち帰られたようである。それは弾圧にたいする抵抗を強化することを要求していた（有罪判決を受けた共産党幹部が抵抗もせずに刑に服するのは論外であると批判していた）が，とくに，それは，とりわけ1928年に予定されていた国会議員選挙において，新しい戦術を採用するよう要求していた。すなわち，共産

[103] Edouard Bonnefous, *Histoire politique de la Troisième République*, Ⅳ, 1960, PUF, Paris, pp.239-240.

[104] D. Wolf, *op. cit.*, pp.70-71，平瀬・吉田訳, pp.74-75; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.95-96.

[105] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, note du 20 avril, 31 mai et 16 août 1928.

党は，これまで同党が採用してきた選挙戦術を変更し，第１回投票で優位に立った社会党候補のために立候補を辞退することを拒否し，第２回投票でも候補者を立てつづけるべきだと指令していた。フランス共産党政治局はこのモスクワの指令に懸命に反抗し，ラ・サンテ刑務所で連絡を受けたドリオもこれにつよく反対し，同様に，書記長のピエール・セマール，ルノー・ジャン，ルイ・セリエ，マルセル・キャシャンらも反対した。しかし，コミンテルン代表のアンベール・ドローズは，アンリ・バルベと共産党青年部のグループ，統一労働総同盟（CGTU）の数人の若い活動家やトレーズらの支持を受けて，党執行部が，その多数のメンバーが刑務所にいたり地下に潜ったりしていたために，機能停止状態に陥っていたのを利用して，反対派を切り崩すことに成功した。

ドリオは，コミンテルンが指令してきた「階級対階級」戦術と呼ばれるこの新しい戦術の全容を知って，おそらくぼう然としたことであったろう。その戦術の根拠を説明するために公式に主張された分析は，現実とは明白に食い違っているとおもわれた。翌年には，とりわけ1928年７－８月のコミンテルン第６回大会でさらに徹底されることになるこの新戦術は，1914－1918年の世界大戦（「第１期」といわれた）後，ついで資本主義の安定化（「第２期」）後，世界は，共産主義の到来を前にした資本主義の最後のあがきと「大衆の急進化」，さらに「ソ連邦にたいする攻撃の危険」（資本主義は，生きつづけるために社会主義の祖国を攻撃しようとしている）を特徴とする「第３の最終期」にはいったという考えに根拠を置いていた。一方，社会民主主義はつねにファシズムに向かおうとしているとみなされ，そのため，コミンテルン各国支部は，社会民主主義の策謀を「社会ファシズム」「社会帝国主義」という語の下にもっときびしく告発することが重要であると主張していた。1921年にレーニンによって決定された最初の政策転換以来，「統一戦線」のスローガンの下で，フランス共産党にはすべての労働者政党（とくにその下部党員たち）と共同行動をとることが要求されていたにもかかわらず，あらたにモスクワから要請された左への方針転換によって，「統一戦線」のスローガンは「階級闘争」への呼びかけに置きかえられねばならず，一夜にして，社会党員は「社会ファシスト」になり，社会党（SFIO）の政治家は「プロレタリアートのもっとも悪質な敵」となったのであった[106]。

しかし，ロシア革命直後，英仏米日など諸外国のロシア出兵とロシア国内の反革命勢力にたいする大規模な軍事・経済援助によって引き起こされた干渉戦争と国内戦争の時代は終わり，ソヴィエト・ロシアの対外関係は好転して，1920年代には，ヨーロッパ諸国とソ連とのあいだで通商協定が結ばれるようになっていた。フランス政府には，ソ連にたいする攻撃の意志は見受けられなかった。また，不活発なストライキの運動が証明していたように，フランスの大衆が「急進化」しつつあるとはおもわれず，さらに，1926年７月のポワンカレ内閣成立後，社会党（SFIO）は明白な野党に転身していた。このような1920年代後半のフランスの現実を前にして，新戦術をまじめに受け取ることは，ドリオには困難であったろう。かれにとっては，フランスにおける共産主義の発展条件についての現実主義的判断にもとづくかぎり，新戦術は硬直的でセクト主義的であった。この結果，1927年夏頃には，ドリオの心は深く動揺し，モスクワの指導者たちへの信頼を完全に失うにいたったのではないかとおもわれる。

ドリオがもと属していたグループ，共産党青

---

[106] D. Wolf, *op. cit*., pp.73-74, 平瀬・吉田訳, p.79. なお，コミンテルンの「社会ファシズム」論については，富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正雄『ファシズムとコミンテルン』東京大学出版会，1978年, pp.135-221（第3章「ファシズムと社会民主主義（1928-1933年）」）参照のこと。

年部が，バルベを先頭に，若きトレーズに支持されて，新戦術を実行しようとしていたのにたいして，ドリオは，さしあたり，慎重で柔軟な，しかし粘り強い抵抗の姿勢をとろうとしていた。公には新しい方針に賛成して，かれ以外の「抵抗派」にたいしては距離を置き，反対派の統合者としての役割をつとめているようにはみえないようにしながらも，ドリオは，ひそかに，党を孤立させ弱体化させるとかれが判断した政策に反対してたたかおうとしていた。

しかし，ドリオの野心は死ななかった。この頃，党政治局と接触のあった警察の情報収集係から寄せられた情報を信じるならば，フランス共産党がモスクワの指令にたいして態度を硬化させていたなかで，ドリオはあらためて書記長への就任を望んでいたようであった。その警察報告によれば，1928年2－3月に，セマールの懇願にもかかわらず，ドリオは，「国会議員の権限の更新を要請することをためらう様子をみせていた。かれは疲労を口実にしていたが，しかし，実際には，原則として議員の職務と両立しない党書記長のポストを熱心に求めていたのである」という。そして，同報告は「しかし，コミンテルンは，国会の共産党グループのなかにドリオが存在していることがぜひとも必要だと考えている。だから，結局，かれはつぎの国会議員選挙では，党の中央選挙委員会の指示通りに，サン・ドニ第4選挙区の候補者となるだろう[107]」と続けている。あるいは，ソ連共産党内で頻繁に仕組まれてきた策謀に人一倍通じていたドリオの心のなかには，モスクワとのあいだで事を荒立てることなく，モスクワにたいしてフランス共産党の自立性を守ることができるのではないかという考えが芽生えていたのであろうか。

1928年4月19日にヴァランシエンヌで逮捕されラ・サンテ刑務所に収監されたドリオは，獄中から，サン・ドニの有権者にかれの議員権限の更新を求めた。選挙戦は容易ではなかった。「階級対階級」戦術の硬化は共産党の力を大きく弱め，「赤い都市」サン・ドニの党員数はいまやせいぜい200人を数えるにとどまり，びら貼りも集会の警備係もみつからなかった。ドリオの立候補は20ばかりの集会と街のなかや工場の入口で伝えられた。ドリオの主要な敵は右翼候補のひとり，リュドヴィク・バルテレミーであり，40歳のかれは先の大戦中に勲章とさまざまな表彰を軍から受け，とくにリフ戦争に参加し，その意味でも反ドリオであった。

1928年4月22日の第1回投票では，ドリオは9,745票を獲得し，2位のバルテレミーの得票数6,239票を断然引き離してトップに立った。社会党（SFIO）候補の得票は，その党員数が増加していたにもかかわらず，大きく後退（その得票数は，1924年にはサン・ドニの登録有権者数の11.2パーセントであったのにたいして，1928年には7.3パーセントに減少）した。元社会党支持者のうちの若干数は，「労働者・農民連合」の共産党候補すなわちドリオを選んだようであった。

しかし，第2回投票は，共産党の戦術硬化と「社会ファシズム」論が多くの社会党員をドリオから遠ざける結果になったことを裏づけていた。すなわち，第2回投票では社会党（SFIO）候補は立候補を辞退したが，その支持者の15ないし18パーセントが棄権し，半数余がドリオに投票したが，約28パーセントが，ドリオの当選を阻止するために，左翼と右翼との境界線を越えてバルテレミーに投票したようであった。ドリオはバルテレミーの9,122票にたいして11,036票（サン・ドニ市の登録有権者数の45.2パーセント，投票数の53.9パーセント）を獲得して当選したが，しかし，フランスのもっとも労働者的な都市で大喜びするほどの勝

[107] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 28 mars 1928, correspondance 11.

利は収められなかった。

全国レヴェルでは，フランス共産党は，第1回投票では前回の1924年の選挙のときよりわずかに得票率を上昇させたが，新戦術にもとづいて，第2回投票でその候補者を例外なく立てつづけたことは第1回投票で共産党に投票した有権者たちに理解されず，かれらの半数近くが，共産党候補にではなく，第1回投票で優位に立った他の左翼候補に票を投じた。結局，共産党は，任期満了の改選議員25人にたいして，14人しか当選させることができず，トレーズ，マルティ，ヴァイアン・クーチュリエは落選した。

しかしながら，1924年のときとはちがい，新議会の議員たちの大多数は共産党議員の釈放に反対投票し，この点について法相もまた一歩も譲らなかった。ドリオは，キャシャンとともに刑務所にとめおかれ，6か月以上拘禁されて，1928年10月25日まで出所することができなかった。出所した数週間後，ドリオは，またもや，2つの禁錮刑の判決を食らう破目になった。すなわち，1928年11月19日，軽罪裁判所は，ドリオに軍人不服従教唆罪で2つの別々の刑——かれが発行責任者であった『前衛』紙に1926年10月に発表されたルール地方占領についての論稿にかんして，2年の禁錮刑と3,000フランの罰金刑，1927年4月，5月，6月に共産党青年部の機関紙に掲載された中国革命についての論稿にかんして，1年の禁錮刑と1,000フランの罰金刑——を科した。ドリオは判決を不服として控訴した。1929年2月4日，軽罪控訴院は2つの判決を是認したうえ，最初の訴訟で認められていた——複数の刑が適用できるとき，そのもっとも重い刑だけを科する——「刑罰の吸収」を取り消したが，1929年5月29日，あらたに開廷された軽罪控訴院は，先に宣告された刑を是認したうえ，その「刑罰の吸収」も認めた。ドリオはふたたび「非合法活動」をしなければならず，ひととき外国で過ごすことを余儀なくされた。しかし，これ以後は，刑務所に拘禁されることはなかった[108]。

1927 − 1928年の長期の拘禁期間はドリオにとくに植民地問題を堀り下げる余裕をあたえ，このときの獄中での熟考から『植民地と共産主義[109]』と題する159ページの本が生まれ，1929年初めに公刊された。それにもかかわらず，ドリオは党の植民地問題中央委員会ではのけものにされ，1929年初め以降，事実上，委員の仕事から外された[110]。党の決定機関内におけるドリオの態度が，執行部を不安にさせていたからであった。1928年11月9日にトレーズが当時ソ連にいたアンベール・ドローズに宛てた長文の手紙が，それを証明している。トレーズの手紙は，最近召集されたフランス共産党中央委員会の会議の様子について語っていた。この会議では，まず（1928年7月17日から9月1日までモスクワで開催された）コミンテルン第6回大会と国際問題について書記長ピエール・セマールが報告し，ついで，フランス共産党の諸問題について，コミンテルンでフランス代表のトレーズがおこなった討議についてトレーズ自身が報告し，これらの報告は中央委員会によってほとんど満場一致で採択されたが，しかし，「そのことは中央委員会全体の完全な意見の一致，とりわけ，そのメンバーの全員がわれわれに課された問題を正確に理解したことを意味してはいません」とトレーズは書き，とりわけ「ジャック・ドリオの3度のスピーチは，政治問題にかんしてかれがはっきりと態度を保留し，新しい方針に反対するたたかいを公然と決意していることを示しています」とのべ，「ド

108) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, note du 4 février et 29 mai 1929, pièce d'《avril 1932》; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.98-99.

109) Jacques Doriot, *Les colonies et le communisme*, Montaigne-Fernand Aubier, Paris, 1929.

110) G. Oved, *op. cit.*, p.382.

リオがたくらんでいるかもしれない策謀」について注意を喚起していた[111]。

トレーズの長文の手紙は，要するに，フランス共産党中央委員会のかなりのメンバーが，モスクワの分析を理解せず，いわゆる「大衆の急進化」とコミンテルン第6回大会で明確にされた「階級対階級」戦術と社会ファシズム論を容易に信じないでいること，ドリオはその反対派のもっとも危険な潜在的分子であり，したがって，かれに良識ある態度をとらせ，さらには，かれをのけものにすることが重要であるとはっきり表明していたのである。ドリオにコミンテルン第6回大会のテーゼを留保なく採用させ，フランス共産党指導部にモスクワによって命じられた新しい方針を全面的に支持させるために，急速にかれにたいする圧力が強められていった。

8. 自己批判

「階級対階級」戦術にもとづく新しい政治方針を適用するには，当時執行部の職務についていたフランス共産党の指導者たちは，コミンテルンの目には十分な保証とはうつらなかった。そのため，コミンテルンは，新しい方針の非妥協性にひきつけられ，モスクワに全身全霊を捧げ，早く党の指導部へ出世できるという考えにも幻惑されていた共産党青年部の若い幹部グループを前面に押し出すことにした。1928年末には，コミンテルンに忠実ではあったが柔弱とみられていたセマールが書記長のポストを去ること，そして，フランス共産党執行部は，執行部の職務を担当する共産党青年部のグループ——アンリ・バルベ，モーリス・トレーズ，ピエール・セロール，ブノワ・フラション——で周囲を固めた「集団的責任体制の政治書記局」によって取って代わられることが予告された。それは元青年部書記長であったドリオにとってはまことに理屈に合わない事態の急変であり，ヴァイアン・クーチュリエの表現によれば，「ひなたちを大事に庇護して育てあげた過保護の母鳥が，自分を岸に置き去りにしたまま水に飛び込む子鳥たちを生んだのは自分であることに気づくような[112]」ものであった。

このすこしあと，『ボルシェヴィズム手帖』の1929年1月号で，トレーズは「国際情勢とコミンテルンにおける右翼の危険」と題した長文の論説を発表して，ドリオが社会民主主義に近づき，トロツキズムの危険を過小評価していると非難した。1929年初め，モスクワで，それまでの数か月間くすぶりつづけていたブハーリンにたいするスターリンのたたかいが最終局面にはいったとき，フランス共産党指導部のドリオにたいする圧力は硬化した。スターリンによるコミンテルン支配の結果，あらためてドリオはその忠誠と帰順を明確に表明しなければならなかった。一方，フランス共産党執行部の多数派は，手強いライヴァル（ドリオ）を失墜させると同時に，かれに執行部の正当性を認めさせるために，ドリオを悔悛させようとした。党内世論との一致を表明し，将来にたいする規律遵守を約束するだけでは，不十分であり，ドリオは，だれもがかれのなかに感じとっていたコミンテルンとの見解の根本的な不一致を告白せざるをえなかった[113]。

1929年初め頃のドリオの心の動きについては，アンリ・バルベがその回想録のなかで証言を残している[114]。かれの回想録はつねに批判的な目で読まなければならないけれども，この部分の証言は偽りがなく，真実味があるようにおもわれる。

当時，重い懲役刑を受けるおそれのために地下活動を余儀なくされてブリュッセルにいたバ

[111] J. Humbert-Droz, *L'Œil de Moscou à Paris (1922-1924), op.cit.*, pp.259-265.

[112] Cit. par H. Barbé, *op. cit.*, p.73.

[113] *L'Humanité*, 10, 17et 24 février 1929.

[114] H. Barbé, *op. cit.*, pp.169-171.

ルベの求めに応じて，ドリオは，かれに会って，ドリオが共産党青年部書記長のポストを失って以来，2人のあいだに生まれていたわだかまりを解くために，ブリュッセルまでやってきた。バルベがフランス共産党の政治方針と執行部の構成についてのコミンテルンの決定をドリオに知らせると，ドリオは皮肉たっぷりで嫌味でさえある口調で返答したので，バルベはおもわず息をのんだ。ドリオは，1926年初めに（それは，コミンテルンが各国共産党の行動の自主性を援助するといっていた時期であった），スターリンがドリオに向かってした話について語り，スターリンは，かれに，コミンテルンは「使用人たち」の集まりではなく，コミンテルンに忠実であると同時に自国にしっかりと根を下ろした指導者たちの集まりであり，かれがコミンテルンの尊敬をえたいならばフランスに根を深く張るように忠告したといった[115]。さらに，ドリオは，バルベと新しい指導者グループのために話を続け，「しかし，党青年部の中核メンバーが党とコミンテルンに役立とうと考えてなにか仕事をしたとしても，コミンテルン執行部の判断次第で，その仕事はめちゃくちゃにされてしまうだろう」と説明した。そして最後には，「あなたは今日，支持されているが，しかし，明日には拒絶されるだろう」といい，「だから，そんなことにはわたしはもうかかわりたくないのだ」とつけくわえた。

ドリオには，ソ連共産党の多数派あるいはひとりの人物にたいする盲従的な賞賛と引き換えにあたえられ，それにもかかわらず，かくも早く棄て去られる運命にある命令には，もはや満足できなかったのである。バルベは，つぎのように語っている。「わたしの目の前にいるのは，すっかり変わってしまったドリオであった。信念と革命的意志に焼きつくされた狂信的なボルシェヴィキの修道僧は，いまでは，抜け目のない，懐疑的で，迷いから覚めた，辛辣な，数年前には崇拝していたものいっさいを笑いものにし，皮肉る政治家に変わってしまった。」

バルベのいう通り，ドリオが「抜け目のない」打算的な策士に変わっていたとしても，しかし，かれがバルベの前でみせた冷笑的態度は，かれの苦悩と混乱をあらわすものであったろう。バルベの目には，ドリオは明確な目的をもってはいないようにみえた。ドリオは，自分がそうしたいときには，党大会の席上で執行部を打ち負かすことができるだろうが，しかし，いまは，そのようなことには関心がないとはっきりいった。バルベには，ドリオの態度がからいばりのようにはおもわれなかった。

バルベの話は続く。実際，バルベとその友人のセロールは，ドリオの立場に，とりわけ「階級対階級」戦術にたいするかれの批判に賛成しそうな代議員の比率は60パーセントあるだろうと推定していた。272人の代議員のうち，40パーセント近い108人が党の専従職員であった[116]が，党組織の締めつけは完全ではなく，代議員には上層部の決定機関に束縛されない自由意志の少数派がいた。ドリオには，大会で勝つか，すくなくとも執行部と対等に勝負できるチャンスがあるのに，なぜかれは大会でたたかうのをあきらめたのだろうか。おそらく，かれは，たとえかれが勝利したとしても，それは多大な犠牲を払う引き合わない勝利であり，モスクワがすぐにその勝利を無効にしてしまうであろうから，即刻，党を去らないのであれば——かれには，その決心がついていなかった——いまは服従して，もっとよい日が来るのを待つほうがよいことに気づいていたにちがいない。党大会を待ちながら，ドリオは「沈黙戦術」のな

[115] スターリンによって話された同じような趣旨の言葉がみいだされるのは，Joseph Staline, *Works*, Ⅷ *1926 January-November*, Moscow, 1954, p.110.

[116] Danielle Tartakowsky, *Ecoles et éditions communistes: essai sur la formation des cadres du parti communiste français*, thèse de 3e cycle, Université de Paris Ⅷ, novembre 1977, annexe Ⅹ Ⅵ, pp.461-462.

かに閉じ込もっていた。

1929年2月10日の『ユマニテ』紙は，2月4日に，党政治局のメンバーの大部分が，ドリオを，かれが党右派のリーダーとしてふるまっていると非難したが，しかし，ドリオは右派という分類を拒否し，その釈明を党大会でおこなうと言明したと報じた。その1か月後，『ユマニテ』紙は，まだ地下に潜っていたバルベがセマールに宛てた手紙を発表したが，そのなかでバルベは，セマールに，ドリオの1票を除いて政治局が採択した決議に全面的に賛同する意志をあきらかにし，この上層部の決定にいたる過程を公表することを支持していた。そして，「この決定過程の公表は，党全体にたいして，われわれの仲間たちのなかにある日和見主義の憂慮すべき危険をあきらかにし，ドリオのような，強情で計算ずくの沈黙のなかに逃げ込んでいる者たちの正体を暴くのに役立つことでしょう。“沈黙戦術”は，同志ドリオにあっては新しいことではありません。かれは新しい選挙戦術の適用に反対するときにも，それを使いました。この“戦術”は，ドリオのまわりに日和見主義者を結集させることを可能にするだけでなく，党大会で人の耳目を集めるような派手な行動によって党を不意打ちすることをねらっているのです」とのべていた。この手紙のなかのバルベの主張は，先にみたような，その後，かれの立場がすっかり変わったのちに書くことになる回想録のなかの述懐とちょうど裏腹の関係になるものであった。

しかしながら，ドリオは，このような党大会での「派手な不意打ち」をおこなうつもりはなかったので，「沈黙戦術」をいつまでも続けるのはすべての勝負を失うことになると気づいたようであった。3月10日，バルベの手紙が『ユマニテ』紙に掲載されたその日，ドリオは，パリ地域第9区の党集会において，中央委員会のテーゼに全面的に賛成し，社会民主主義についてのかれの誤りを認めると明言し，その1週間後，クリシーで開かれたパリ地域の党大会で，詳細で能弁な自己批判をおこなったのである。かれは「右派の社会党員と左派の社会党員を区別すること，同じ社会民主主義集団の“からだ”の右手と左手を区別することがいかにまちがっているかは事実によって証明されました」といい，これまで，選挙にさいしては，第1回投票で優位に立った社会党（SFIO）候補が，「経営者の手先である」右翼候補と対峙しなければならないとき，共産党は立候補を辞退したが，それは，「第2回投票でわれわれが候補者を立てつづければ，若干の部門の労働者たちとの関係を断絶させてしまうのを恐れた」からであり，また，そのために「階級対階級」戦術にも反対したのであったが，「ノール県やロワール県におけるストライキは，今日，プロレタリアートがわが党だけをかれらの唯一の擁護者であると考え，われわれの戦術を非難してはいないことを証明しています」とのべたのであった。それは月並みで，まったく非現実主義的な自己批判の言葉であった。

つぎに，ドリオは，前年，社会党（SFIO）支部と労働総同盟（CGT）の組合に「統一戦線」の提案をしようとして，共産党の勢力圏内にあるすべての組織を集めた地方委員会の設立をかれが提言したことにかんして，「この提案はコミンテルンの理論と一致していなかったといわなければなりません・・・新方針への転換が必要であり，コミンテルン第6回大会がわれわれに教えているように，工場にはいり，工場を獲得しなければなりません」といい，「コミンテルンに同意しなかった人びとはすべて，わたしが表明した見解にしがみついていたのであり・・・わたしにはその論拠をかれらに提供しつづける権利はありませんでした・・・共産党に反対するブルジョワたちの雇人になることは許されません[117]」とのべ，罪を深く悔いたので

[117] *Germinal*, 23 mars 1929.

あった。

1929年3月31日－4月7日にサン・ドニで開催されたフランス共産党第6回大会においても，ドリオがサン・ドニ選出の代議士であったにもかかわらず，同地区の党機関と市会議員たちは，かれの「日和見主義」に反対の態度をあきらかにした。政治局を代表してブノワ・フラションが国際情勢について報告し，そのなかで，「コミンテルンのテーゼに全面的に賛同しなかった同志たち」を激しく非難し，会議の進行のなかで，ドリオは「右翼と妥協的な」態度をとったとして名指しでやり玉にあげられた。

大会4日目の4月3日，ドリオは最後に演壇にのぼり，長い自己批判を始めた。かれは，先のパリ地域第9区の党集会で展開した論法を，いくつかの点ではさらに問題を堀り下げながら，ふたたび繰り返し，かれが誤りを犯したのは，「階級対階級」戦術が党を社会党（SFIO）支持の大衆や未組織労働者から遮断してしまうのではないかと恐れたからであるといい，しかし，「この18か月間の出来事は，わたしが感じていた恐れをはっきりと打ち消しました。この数か月間に展開された労働者のたたかいは，かれらの圧倒的大多数がわが党の戦術を理解していることをあきらかに示しています」と告白した。そして，「わたしが1年前に戦術の譲歩を要求したことは，わが党にとっていかに危険であったことでしょう。したがって，わたしに反対する精力的なたたかいの先頭に党執行部が立ったのは当然でした」，「わたしが社会党（SFIO）の左派と右派を分けることによって誤りを犯したとコミンテルンが強調したのは，正しかったのです」とのべ，コミンテルンと党執行部にたいする敬意を表明した。最後に，ドリオが，「誤りを認めるのを拒否することは，党内外のすべての日和見主義者を自分のまわりに集結させることです。はじめは小さな不一致だとしても，すこしづつ溝は深まります。わたしが今後このような役割を演じることはないでしょう。その結果，フランスでも外国でも，右寄りの者たちは希望をすっかり失ってしまうにちがいありません」とのべて自己批判のスピーチを締めくくったとき，大会は拍手喝采したのであった。

しかしながら，コミンテルン代表のウィリアム某（おそらくボリス・ミハイロフというロシア人の偽名だったとおもわれる[118]）は，ドリオの口調がふまじめのようにおもわれたからであろうか，あるいは新しいスターリンの衣裳を着せるには，ドリオの個性があまりにも強すぎるとおもったからであろうか，ドリオの自己批判が十分ではないといい，セマールもまた，4月5日の『ユマニテ』紙の論説のなかで，ドリオが「党とコミンテルンにたいして軽蔑的態度をとった」と指摘し，「したがって，かれの告白は，コミンテルン第6回大会の決定を実践しようとしている党にとって，十分な保証とはなりえない」と結論した。たしかに，ドリオのスピーチは，党執行部の多数派にたいする多くの辛辣な言葉を含み，同僚に抱いていたかれの激しい敵意と，かれらの前に屈したとはみられたくないという意志を感じさせた。この自己批判という屈辱的な試錬によって痛めつけられたかれの自尊心と傲岸さが突飛な語句のあちこちに表現され，それらの言葉によって，ドリオ自身はかれの服従の事実を示したつもりであったろうが，しかし，むしろ，それらはかれのスピーチが呼び起こした不信を増大させたのであった。

ウィリアムは，4月6日のスピーチで，「大会におけるドリオの告白は，党に向かっての大きな一歩です。とはいっても，わたしは，なお，このドリオの党への歩み寄りかたは，かれがまだ右翼の病気にとりつかれていることを証明していると考えています。かれが党に歩み寄ったのは，左足でではなく，右足でだったか

[118] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.108.

らです」，「ドリオは心理的告白をしたのであり，党はそのような告白に満足することはできません」，かれのなかから「右派の残存物」を一掃したことをあきらかにする「政治的告白をドリオに要求しなければなりません」とくどい説明を繰り返した。「左足ででではなく，右足で歩み寄った」というような比喩的な表現を用いることによって，ウィリアムは，ドリオが，自分の誤りを気づかせたのは，党中央委員会でもコミンテルンでもなく，「事実」であったと明言したのを非難したのであろう。

大会が終わろうとする4月7日午後10時30分，ドリオは，セマールとウィリアムに答えるために，ふたたび発言を求め，「わたしは，執行部がわたしに託した政治的な仕事をつねに規律正しくおこないました。それは，わたしが自分自身の判断以上にコミンテルンの方針を信頼していたことのあかしとなります」とのべて，ふたりがかれに向けた非難を不当だと反論した。さらに，「わたしはわたしに提示されるすべての政治的テーゼを検討し，これからも検討しつづけるでしょう。わたしはそれを実際の出来事と照合します。もし事実にもとづいてわたしに非があることが分かったならば，わたしは誠実にわたしの誤りを認めます」とのべ，「しかし，わたしは自分が犯してはいない他の誤りを認めたくはありません」と強調し，最後に，かれが新しい政治局の選出には立候補しないと告げて，かれの自己批判を続けるよりはむしろ，幹部のポストを去るであろうことをほのめかして，スピーチを終えた。このあとセマールが大会最後の発言をし，新しい中央委員のメンバーを指名したあと，ふたたび長々とドリオにたいする攻撃を大げさな言葉を弄して繰り返した。ドリオが身をゆだねた恭順と痛悔の儀式はかれにいっさいの批判精神を放棄させるにはいたらず，その点において，かれは，新しいスターリン的規範に照らせば，復帰を許されることのない人物とみえたのであった[119]。

ドリオは，この大会で受けたつらい試練を一生忘れることができず，モスクワの気に入るようにかれをしつこく糾弾しつづけた誹謗者たち——セマールやデュクロたち——をけっして許さなかった。デュクロは，当時，警察に追われていたため，大会には参加しなかったが，『ユマニテ』紙にきわめてきびしい論説を発表することによって，反ドリオ・キャンペーンを全力で支持したのであった。その後，かれとドリオとの関係はいちじるしく悪化した[120]。

コミンテルンはドリオが党を割り分裂させる危険を冒すことは望まず，自己批判したドリオを「苦境から救い出し，復活の機会をあたえよう」とした。ドリオは政治局のかれのポストを失わなかったが，政治局におけるドリオの態度に我慢ならなかった党執行部は，政治局書記の仕事をバルベ・グループに任せて，ドリオからその特権を奪った[121]。さらに，党執行部はドリオがサン・ドニに根づくのを助けようとはせず，1929年5月の市会議院選挙のための共産党候補のリストにドリオが加わるのを許可しなかった。

ドリオが自己批判の試練を耐え忍ぶことを受け入れたのは，かれをつくりあげ，かれが全面的に身を捧げてきた共産主義の世界の外での自分の人生を考えることができなかったからであり，また，おそらく，勝負がまだ終わっていないと判断したからでもあったろう。共産党からの離党を決意していなかったドリオには，歯を食いしばって窮地を脱し，もっとよい日がくるのを待つしかなかった。

---

119) D. Wolf, *op. cit*., pp.75-79，平瀬・吉田訳, pp.81-84; J.-P. Brunet, *ibid*., pp.106-110; Ph. Burrin, *op. cit*., pp.54-55.

120) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 5 avril 1933.

121) J. Degras ed., *The Communist International 1919-1943*, *op. cit*., Ⅲ, p.42; Albert Vassart, *Mémoires inédits*, IHS, Paris, p.147; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.109.

1929年8月21日，元フランス共産党中央委員会のメンバーで，扇動・宣伝部の責任者であり，15か月間ロシアに滞在して，そのうちの1年間はコミンテルンに協力したという経歴をもつポール・マリヨンが，党書記局のメンバーに宛てた手紙を，『ユマニテ』紙がその掲載を拒否したため，社会党（SFIO）機関紙『ル・ポピュレール』に発表した。かれは，のちに，フランス人民党の結成に参加し，ドリオ側近の副官のひとりとなる人物であった。マリヨンは，この手紙のなかで，「ソ連とコミンテルンの指導者たちが，世界の政治的，経済的発展や労働運動の発展について，さらには，かれら自身の国の状況について決定的にまちがった考え方をしている」と確信するようになったとのべ，「“プロレタリア独裁と社会主義建設”といううわべの顔の背後には・・・きわめて残酷で悲しむべき現実，スターリンから村の最下位の駐在員にいたるまでの，あらゆる種類，あらゆる能力の数百万の官僚たちの排他的特権階級が，無分別な政策とせんさく好きで，異端糾問のようにきびしい絶対的独裁によって，経済的，精神的窮乏のなかに抑えつけられた国民を支配しているという現実が隠されている」と主張した。すでにソ連共産党やコミンテルンにたいする批判意識に目覚めていたドリオが，マリヨンの分析に賛同しないがためには，かれはあまりにも多くのロシア体験をしていた。

マリヨンは，つづけてコミンテルンのからくりを告発し，そのトップでは，すべての権力が「全能の小グループの手に集中し，各国共産党の指導者たちはかれらによって賦役を課せられ，意のままに従わせられているあわれな雇人にすぎない」と主張し，フランス共産党内部では，いかなる種類の異論も可能ではなく，「サン・ドニの大会での悲しい“論争”は，大会参加者のもっとも素朴な人びとから討論への願望を奪ってしまう性質のものであった」とのべていた。さらに，マリヨンは，フランス共産党がとってきた政策を激しく非難し，「（第1次世界大戦勃発記念のために，コミンテルンによって各国支部に押しつけられた）8月1日のデモについての過度の宣伝，“大衆の急進化”を証明するためのとてつもなく大規模なストライキの呼びかけ，やがて到来する戦争からソ連を防衛しなければならないというヒステリーなどは・・・今日では，すべて期待はずれで滑稽な冒険に終わり，明日には，きわめて深刻で，たぶん決定的な敗北に終わるしかない」とのべて，共産党書記局メンバーを真っ向から罵倒した[122]。

ドリオがマリヨンの分析に共感したのはまちがいない。かれは，フランス共産党とコミンテルンとの運動が現実から大きくそれていることをよく知り，その前途がスターリンの忠僕によって形成される従順で思考力を奪われた幹部たちの手に握られるかもしれないことを予想していたにちがいない。では，なぜ共産党にとどまるのか。それは，反逆者となった場合には，共産党と社会党（SFIO）とのあいだに残された空間を揺れ動く，将来の不確かな政治家たちのひとりになり，時代の仕掛けた落とし穴に落ち込んでしまうだろうからであった。それに，ドリオはひとりの代議士であるだけでは満足しなかった。かれには，まだ，もしクレムリンで方針の変更があれば，そのときにはフランス共産党の指揮をとることができるという一縷の希望を捨て切れなかったのであろう[123]。

その後も，ドリオは下院での議会活動を続け，サン・ドニでは1929年5月1日のデモを指揮し，外国でも，6月初め，ルール地方で，ドイツ共産党の幹部とともに国際的なデモを組織した[124]。この頃には，一時，党政治局の会議

---

[122] *Le Populaire*, 21 août 1929.

[123] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.110-111.

[124] *L'Emancipation*, 27 avril, 4 mai 1929; *Archives Nationales*, F^7 13100, dossier《communisme》, 1928, notes《politiques générales》, note du 5 juillet 1929.

にはほとんど出席せず，それが理由で政治局からの非難を浴びた[125]が，やがて党上層部のなかで積極的に活動するようになり，党の方針も注意深く遵守した。1931年9月末には，いつのまにか執行部の重要人物になっていたトレーズが，党中央委員会で「政治局メンバーの同志ドリオは長い間，“階級対階級”戦術に反対し，われわれはかれを説得することができませんでした。しかし，すこしづつ，かれはその考えを修正してきました。いまでは，ドリオに望まれるのは，もはや中央委員会の方針を規律正しく実行するということではなくて，信念をもって党の方針を立案するという仕事への意志です」とスピーチするほどに，ドリオが確実に変化したことを党上層部が認めるまでになっていた[126]。

1931年9月には，フランス共産党の党内情勢は，ドリオには，かれの分析の正しさを裏づけているようにおもわれた。共産党にたいする弾圧に労働者階級は同情的であったようにみえたが，それにもかかわらず，共産党が「大衆の急進化」というまったく架空の主張に合わせて行動したことによって，その支持者はひどく減少していた。1928年以来，共産党が呼びかけた大規模デモはいずれも手厳しい失敗に終わっていた。警官隊の大量動員と党員の予防検束がその失敗になにほどか関係していたであろうが，しかし，決定的要因は潜在的デモ参加者の不足であった。たとえば，コミンテルンがそのすべての各国支部に1929年8月1日の「帝国主義戦争に反対しソ連邦を防衛するための国際行動デー」（1933年まで毎年繰り返された）のためのデモの実施を命じたときにも，フランス共産党は，ソ連にたいする資本主義諸国の攻撃が間近に迫っていることをフランス国民に信じさせることはできなかった。同様に，「失業反対国際デー」（1930年3月6日，1931年2月25日，1932年2月4日）のときには，失業の打撃を受けていない地域の労働者たちを動員するのはむずかしかった（世界恐慌の到来にもかかわらず，1930年代のフランスでは，大規模工業企業が支配的なパリ地域を除いては，失業率はきわめて低くとどまった[127]）。

フランス共産党の党員数は大きく減少し，1925年にはなお6万人いた党員は1930年には3万9,000人にまで減少し，さらに3万人というレヴェルに近づきつつあった。離党や除名があいついだ。1929年10月には3人のセーヌ県会議員が除名され，そのうちの2人はサン・ドニ地区選出の県会議員であった。翌月には，6人のパリ市会議員が離党し，パリ市役所で共産党を代表するのはアンドレ・マルティただひとりになった。離党した6人の市会議員は，共産党を「プロレタリアートの革命的解放の希望をもたらさねばならない党を奈落の底に追いやった腕白小僧，野心家，忍従者の仲間」と表現して告発し，「労農党（POP）」を結成した。同党は，1930年末に，「社会主義・共産主義連合」と合併して「プロレタリア統一党（PUP）」となった[128]。

フランス共産党の状態がきわめて悲劇的であったので，1930年4月に，わずかばかり右への戦術転換がコミンテルンによって決定されたあと，共産党中央委員会によって適用され，6月17－18日の会議で，「右翼日和見主義者と左翼セクト主義者に反対する」「2つの戦線におけるたたかい」が目標として設定された。そして，ドリオが予想していたことが起こった。コミンテルンが，フランス共産党青年部の（やがて「バルベ・セロール・グループ」と呼

[125] *Discours de Celor, Thorez et Barbé au CC du 17 juillet*, brochure éditée par le PCF, discours de Thorez, p.33.

[126] *L'Humanité*, 3 octobre 1931.

[127] 竹岡敬温「世界恐慌期フランスの失業率」『大阪学院大学経済論集』第15巻第1号，2001年8月，pp.1-17.

[128] J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge, op. cit.*, pp.290-303; J.-P. Brunet, *Histoire du PCF (1920-1982), op. cit.*, pp.40-43.

ばれるようになる）中心グループの，「コミンテルンとグループのメンバーでない党の他の幹部たちの知らないうちに党を指揮しようとした分派的行動」を断罪したのである。モスクワに送られたバルベとセロールは，党政治局とコミンテルンにおけるかれらの権限がすべて剥奪されたことを知った。バルベは懸命に自己批判して，党のメンバーとしてとどまることが許されたが，自己批判を拒否したセロールは党内に潜入している私服刑事であると非難され（かれには警官の叔父がいた），屈辱的な除名処分を受けた。つい1年半ほどまえに，コミンテルン自身がバルベやセロールなど青年部の中心グループに党執行部の職務を担当するよう指令したばかりであった。共産党青年部のメンバーを対象にしておこなわれた公開の懲戒処分は，フランス共産党の歴史における最初の魔女裁判であった[129]。

1926年6月のリールでの全国大会のあと，党の政治局メンバーに選出され，1930年7月以来，政治局書記の肩書きをもっていたモーリス・トレーズは，この頃にはもっとも著名な幹部のひとりになっていたが，かれのそばには，ひそかにコミンテルンから派遣された職業革命家のグループがいて，党執行部を厳重に監督し，ソヴィエト・モデルに従って執行部を完全に組織しようとしていた。1931年夏，「バルベ・セロール・グループ」の失墜後，トレーズは党内議論の奨励とセクト主義の排除をめざした説明キャンペーンに乗り出した。「口を開こう」（8月21日），「それでも，とにかく討論しよう」（9月1日）というのが，『ユマニテ』紙の一連の論説のタイトルであった。これらのタイトルは党員たちのあいだで評判になったが，しかし，やがて党員たちは，モスクワの指令の狭い範囲内でしか「口を開いたり」「討論したり」することができないことに気づいた。

[129] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.113-114.

共産党の勢力衰退は容赦なく続いた。ドリオが，このような状況は長く続くはずがなく，いずれ近いうちに，コミンテルンは，心ならずも規律を尊重して自分が反対していた方針にあえて従ってきたかれ自身の手に，党の指導をゆだねるのではないかと期待したとしてもけっしておかしくはなかった。

さしあたり，ドリオはサン・ドニにもっと深く根づくべきだと考えた。しかし，先述のように，党執行部は1929年5月の市会議員選挙のための共産党候補のリストにかれが加わるのを許可しなかった。選挙戦は激戦が予想されていた。1928年の国会議員選挙でドリオに敗れた右翼候補リュドヴィク・バルテレミーは，サン・ドニで共産党から王位の座を奪おうという希望を棄てず，同市に居を定め，非左翼勢力全体を連合させることに成功していた。勇敢にも，かれはいくつもの共産党の集会で論争を挑み，ドリオにたいして植民地問題にかんする討論会を提案してきた。3月14日，市立劇場で3,000人以上の聴衆を前にして討論会がおこなわれたが，しかし，ドリオの演説が終わったあと，バルテレミーの演説は「インターナショナル」の歌声で妨害され中断させられた。そこで，バルテレミーは，サン・ドニ市のあらゆる地区で，コンサートやミュージックホールの出し物などのアトラクションを巧みに配した私的集会を繰り返し，無数の部数の反左翼新聞を無料で街中に配布した。

このようなタイプの新しい宣伝活動を前にして，共産党は，もしドリオがいなかったならば，いかにすべきか途方に暮れたことであろう。ドリオはすべての集会を指揮し，なぜかれが共産党候補のリストに載っていないのかという質問には真剣に答え，共産党との強い連帯を証明しようとした。また，ドリオはバルテレミーの立候補の政治的，社会的意味を熱心に説明し，バルテレミーが指揮するメンバーと若干の大企業，とりわけパリ地域の電気およびガス

会社とのつながりをあきらかにして，かれらが選挙に当選すれば，サン・ドニ市当局と労働者階級の利益を脅かす大きな危険となることを強調した。

1929年5月5日，社会党（SFIO）候補のリストが有効投票の11.5パーセントしか獲得できず，バルテレミーのリストが37パーセント獲得（1928年からは3ポイント後退）したのにたいして，任期の満了した共産党市長カミーユ・ヴィヨーメによって率いられた共産党候補のリストは51パーセントの票を集めて，全員当選した[130]。選挙報道の解説者だけでなく共産党員をも驚かせたこの第1回投票での勝利は，その大部分は，選挙運動の推進役をつとめたドリオの行動のおかげであった。しかしながら，ドリオは市会議員にさえもなれず，つぎの選挙は原則的として6年後にしかやってこなかった。

しかし，運命がかれを助けた。1930年から1931年にかけて，サン・ドニ市役所を危機が見舞い，市政は極度の混乱に陥ったのである。

発端は市長ヴィヨーメの裁判であった。ヴィヨーメは，かれが「予備役兵士たちに，予備役期間に反対するたたかいを組織し，野営地内でデモをし，かれらの労働者階級としての義務を理解するよう呼びかける」記事を掲載させた共産党サン・ドニ地区の週間機関紙『解放』の発行責任者として裁判にかけられ，懲役2年の刑と2,000フランの罰金刑を宣告された。控訴審では，減刑されたが，懲役6か月の刑と1,000フランの罰金刑の判決を受けた。ヴィヨーメは，おそらく，拘禁を免れたかったのであろう，1929年10月に党から除名されたサン・ドニ地区選出の2人の県会議員にたいする「検事役」はしたくないということを口実にして，突然，党を離党した。

ヴィヨーメの離党は，サン・ドニの市会議員たちのなかでバルベ・グループの影響下にあったメンバーの離党を引き起こした。ヴィヨーメはなお党との妥協点をみつけることができると信じていたようだが，しかし，かれは市長の職務が党の意のままになることは承認できず，市会議員にたいして集団辞職を提案した。市会は大騒ぎになり，市会議員の大多数は1930年度の当初予算案への投票を拒否し，市政は麻痺状態に陥った。

数週間後，共産党はようやく断固たる処置をとることを決定した。1930年2月14日，サン・ドニ市立劇場での集会で，党に忠実な33人の市会議員の辞職が発表された。さらに，3人の少数派の議員も辞表を提出したので，セーヌ県庁は，選挙実施の権限を委任した5人の役人からなる特別委員会を市役所に設置した。

1929年の前回選挙のときと同様に，ドリオは，『解放』紙と『ユマニテ』紙に発表した論説やかれが指導した多数の集会によって，共産党の選挙戦を推進した。しかし，今度は，党にとって状況が深刻であったので，党執行部はドリオを候補者リストから外したままにしておくことができなかった。今回は共産党候補を先導したのはドリオであり，名目的にアンリ・バルベとサン・ドニの冶金工ギャストン・ヴネがかれを補佐した。共産党のライヴァルの左翼諸政党も強力な行動を起こし，社会党（SFIO）と1929年末に共産党からの離党者によってつくられた労農党（POP）は，サン・ドニのかれらの同志を応援した。ほとんどの大新聞は辞職した市会議員たちに反対して激しいキャンペーンを展開し，右翼候補リュドヴィク・バルテレミーにとっては，追い風となった。

1930年3月16日におこなわれた第1回投票の結果は，はっきりと共産党の後退を示し，共産党候補のリストは，有効投票の40.8パーセントしか獲得できず，前年とくらべて10ポイント以上下回った。一方，バルテレミーはその態勢をなんとか維持した（前年より1.8パーセ

[130] 特定の個人にではなく，名簿に記載された候補者グループに投票する名簿式投票制がとられていた。

ントの減少)。この両者が減らした票は労農党(POP)候補のリストに集まり(11.2パーセント),社会党(SFIO)候補のリストは11.6パーセントにとどまった。共産党が1位を維持したので,労農党(POP)と社会党(SFIO)の執行委員会は,共産党候補のために,かれらの候補者の立候補辞退を決めたが,共産党の「階級対階級」戦術と「社会ファシズム」の理論にもとづいて,ドリオは両党の立候補辞退を策略だとしてはねつけ,「われわれはかれらにたいしてたたかいつづけるであろう」と言明した。

このドリオの言明は,党執行部の見解と一致するものであったが,しかし,ドリオの態度は社会党(SFIO)支持の有権者たちを右翼のほうに押しやるものであり,侮辱を受けたと感じたかれらは第2回投票ではバルテレミーのリストに投票したようであった。第2回投票では,バルテレミーのリストの得票率が有効投票の47.7パーセントであったのにたいして,共産党は51.9パーセントを獲得し,同党はようやく困難な局面を脱することができた。

共産党の勝利後,市議会で新しい市長,助役の選挙がおこなわれたが,ドリオの政治的態度はなお党執行部を満足させず,かれの名は党の決定機関によって退けられ,市長のポストは39歳の冶金工ギャストン・ヴネに託された。ヴネは,当時のフランス共産主義の特徴であった労働者階級至上主義の傾向に合わせて,工場で働きながら,サン・ドニの市長を務めた。

しかし,選挙に勝利したにもかかわらず,共産党の混乱はまだまだ続いた。1930年10月,サン・ドニ市の市政管理において若干の不正が発覚し,セーヌ県の視察官が派遣された。「ソヴィエト派の共産党員」の「公金横領」を告発するすさまじい新聞キャンペーンが始まり,社会党(SFIO)機関紙『ル・ポピュレール』から極右の新聞にいたるまで,「悪党どもの巣窟,サン・ドニ市役所。ロシアでと同じく,共産党員たちが金庫を略奪している」,「サン・ドニ市役所のボルシェヴィキのスキャンダル・・・納税者の金が気まぐれに浪費されている」などと書き立てた。県の調査の結果,1931年1月19日付の政令によって,市長ヴネと2人の助役が罷免され,1月29日に正式に通告された[131)]。共産党は,非難された不正のいくつかにたいして異議を申し立てたものの,若干の「不正の事実」は否定できなかった。共産党の抗議活動のなかで,ドリオは市議会において「フランス最大の労働者の市役所,最大の共産主義の市役所の破壊が目論まれている」と叫んだ。

1年足らずまえに改選されたばかりのサン・ドニ市議会は,まだ欠員は生じず,全員が揃っていた。それは新しい市長を選出するために不可欠の条件であった。しかし,2人の共産党議員が県知事によって辞任させられようとしていた。かれらが,セーヌ県軽罪裁判所によって,ひとりは警官暴行罪で禁錮2か月,罰金刑100フランの刑,もうひとりは犯人隠匿罪で禁錮6か月,罰金50フランの刑を受けていたからである。補欠選挙になれば今度は負ける公算が大きいと考えた共産党サン・ドニ支部書記は,党書記局に状況の重大さを説明し,唯一の解決策はドリオをサン・ドニ市長として選出することであると主張した。党執行部は,ドリオが新しい方針に従い,政治局の会議に規則正しく出席するようになりはしたものの,かれがふたたび政治的見解の相違や規律違反の意思を突然あきらかにするのではないかと懸念したが,最後には,この提案を受け入れた。

この結果,1931年2月1日,サン・ドニ市議会はドリオを新しい市長に選出した。感謝の挨拶のなかで,ドリオは,かれが市長に任命されたことは,市役所から共産党を追放しようとした県知事にたいする最良の返答であると力説した。こうして,ドリオはようやくサン・ドニという自分の領地をもつにいたり,以後数年

131) J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.119-120.

間，このフランス歴代の王家の墓所サン・ドニを難攻不落の共産主義の砦に仕立てあげようとしたのである[132]。

9.「赤い」都市の市長

ドリオがサン・ドニ市長に選出された1931年2月には，共産党は，サン・ドニでも危機的な状態にあった。党費を払っているものは200人から300人ばかりいたが，そのうち実際に活動していたのはわずかに70人ほどにすぎなかった。しかしながら，党組織はようやく立ち直ろうとしていた。1932年5月の国会議員選挙では，ドリオの立候補は難なく共産党執行部によって認められ，1932年1月末の市立劇場で開かれた大集会で，かれは名状しがたい熱狂的な歓呼の声によって迎えられた[133]。それは，サン・ドニの活動家たちがかれらの党とかれら自身にたいして自信を取り戻させる異論のないリーダーをみつけることができたからであった。

選挙戦は激戦であった。社会党（SFIO）とプロレタリア統一党（PUP）も候補者を立てたけれども，共産党にとって危険な相手は右翼候補であり，最大の敵はリュドヴィク・バルテレミーであった。最初のトラブルは，3月7日に，政治色のない商人たちの集まりによって企画された街頭での古道具市の機会に起こった。この日，多数の群衆がサン・ドニに押し寄せてきた。両陣営のびら貼り人のあいだで乱闘が起こり，10人余りが警察に逮捕され，1か月後，2人の共産党員が警官暴行罪と反抗罪でそれぞれ2か月と1か月の禁錮刑の判決を受けた。バルテレミーの公的，私的集会はドリオのコマンド隊員によって妨害され，かれが競馬場界隈で開いた集会にたいしては数発の発砲さえあった。

ドリオとバルテレミーそれぞれの陣営の政治的宣伝合戦では，あらゆる方法が用いられた。2,500人の多数の出席者を集めたという1月19日の「共和派社会勢力連合」の大会で候補者として選出されたバルテレミーが，ソ連と共産主義にたいして激しい攻撃を浴びせつつ，サン・ドニ市政の欠陥を告発することに専心したのにたいして，共産党の方は，街中のすべての映画館で市の事業についての宣伝映画を上映した[134]。共産党サン・ドニ地区の機関紙『解放』は，その頃，発行部数を大きく増加させていて，共産党にとってこのうえない宣伝手段となった。バルテレミーは大企業と結びついた右翼団体の有力人物として広く知られていたので，同紙はかれにたいする激しい個人攻撃を展開した。

投票は5月1日におこなわれ，ドリオは，選挙区全体で2万6,139人の登録有権者，2万2,367票の有効投票のうち1万1,967票を獲得し，バルテレミー（7,946票），社会党（SFIO）候補（1,628票），プロレタリア統一党（PUP）候補（778票）を大きく引き離して1位となり，第1回投票で当選を決めた。フランス全体では，共産党が前回選挙のときの106万4,000票から78万5,000票に（登録有権者の9.3パーセントから6.8パーセントに）後退して惨膽たる結果に終わり，第2回投票ではキャシャン，マルティ，デュクロなどの多くの幹部が敗北を喫したことをおもえば，サン・ドニの選挙の成果は驚嘆すべきものであった。

ドリオの勝利には，多くの原因があったろう。まず，世界恐慌の到来の結果，他の市町村以上にサン・ドニを襲った失業の増加である。サン・ドニはセーヌ県のなかでも大規模工業の賃金労働者がもっとも多い市であった。1931年12月末には3,056人であったサン・ドニの

[132] J.-P. Brunet, *ibid*., pp.121-122; D. Wolf, *op. cit*., pp.82-84, 平瀬・吉田訳，pp.88-90.

[133] J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge, op. cit*., pp.302-303, 363sq.

[134] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.124-125.

登録失業者は，1932年4月末には5,791人を数え，そのうち636人は6か月以上失業し，すでに失業手当の給付も受けていなかった。これに部分失業を加えれば，失業の犠牲者ははるかにもっと多くなろう（世界恐慌の到来と1931－1932年の右翼内閣の不十分な恐慌対策の結果，フランスの国民は保守派政権を見限り，1932年5月の総選挙は急進党と社会党SFIOの左翼連合の明確な勝利をもたらした。議席数では急進党が社会党を上回り，第1党となった。しかし，恐慌は共産党の支持増加に結びつかず，反対に同党は多くの議席を失い，全国レヴェルでは惨敗に終わったのである）。

個人的要因――ドリオのバイタリティ，大衆のリーダーとしての資質，戦闘的態度，迅速な行動，それらとは対照的な弁舌さわやかな愛想のよさなどの人間的魅力――も作用したことであろう。サン・ドニは，ついにそのお気に入りの寵児をみいだしたのであった。ドリオは，共産党の正統的な立場のやや埒外にいたものの，党の指導者としてのその名声は知れわたっていた。サン・ドニの市民たちは，1929年4月のサン・ドニでの共産党大会におけるドリオの自己批判や，1929年5月と1930年3月の市会議員選挙でかれが党からのけものにされた事実を，驚きの目で，しかし，よく理解できないまま，見守っていた。もしドリオの選挙戦が党の公式的見解とのなんらかの不一致を示していたとしても，おそらく多くの有権者たちは，党の立場には賛成せずに，かれに投票したことであろう。

ドリオの勝利は，サン・ドニ地区で1932年初めから増えはじめていた共産党への入党の流れを増幅させた。『解放』紙によれば，1932年1月1日から5月25日までに，サン・ドニでは396人の労働者が入党し――5月1日から25日までの入党者数は145人――，その内訳は冶金工96人，建築労働者95人，非熟練工40人，女性36人，青年（共産党青年部に所属）74人であった[135]。5月31日，市立劇場で開催された集会で，共産党はこれらの新党員を歓迎し，ドリオが演説に立ったとき，会場は全員総立ちで，「インターナショナル」を歌って，かれを迎えた。以後，この慣習がサン・ドニでのすべての集会で踏襲された。

党員募集の努力は続けられ，1934年初めには，サン・ドニ地区の党員数は700人ないし800人に達していたとおもわれる。全国の共産党の党員数が1933年末まで減少しつづけた[136]のにたいして，サン・ドニでの党員数増加は全国レヴェルでの党の傾向と完全に逆であった。1933年には，7つの工場細胞が再建され，既存の3つの細胞に加えられた。サン・ドニ市の街頭で売られる『ユマニテ』紙の販売部数は（水増しされた公称の数字であるが）1931年の300部から1932年の900部に，さらに1933年には1,200部，1934年3月には1,400部に増加した。サン・ドニ地区の機関紙『解放』については，さまざまな情報を突き合わせた結果，その発行部数は1931年に2,800部，1932年からは4,000部，ピーク時には4,800部に達していたと概算することができる[137]。

ドリオの指揮の下，サン・ドニ市は，税制改革が可能にした大規模予算政策によって，さまざまな分野で重要な事業を実現した。慈善事業と生活保護の支出を大幅に増加させ，慈善局に交付される補助金の総額は，1930－1931年の約160万フランから1935－1936年には300万フランに増額された。それはこの2年度それぞ

135) *L'Emancipation*, 28 mai 1932.

136) 共産党の党員数の減少傾向がゆっくりと逆転したのは，1934年3-5月のことにすぎない。アニー・クリージェルは，共産党の党員数を1933年5月1日には2万8,000人，1934年5月1日には3万人と推定している。A.Kriegel, *op. cit*., pp.193-196; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 1629, 1er mai 1933, dossier《Circulaires, correspondance, mesures d'ordre》, B/a 1630, 1er mai 1934, dossier《Prévisions et mesures d'ordre》.

137) J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.126-127.

れの市の経常支出の5パーセントと6.7パーセントを占める額であったが，それらのうちのかなりの額がパリ郊外で唯一の施設であるサン・ドニの慈善病院の運営に当てられ，その他の養護施設（市立孤児院や母子保護施設）も充実された。公教育や児童のための事業に当てられる予算もいちじるしく増額され，林間・臨海学校，青少年の家，奨学金公庫などの関連支出はドリオのてこいれで顕著に増えた。林間・臨海学校を利用した子供の数は，1931年の1,000人から1934年には3,000人に増加したが，その利用はすべて無料であった。共済組織の幼稚園・小学校などの合同校舎が設立され，市立プールが建設され，託児所や市立図書館が増設され，労働組合センターには共済団体の使用に供される新しい建物「共済組合の家」が付設された。さらに，1934年1月末には7,420人にのぼっていた失業者（登録失業者）のためのさまざまな救済事業がおこなわれた。

これらの市の事業は，主として，共産党のサン・ドニ地区機関紙『解放』によってたえず宣伝された。新しい施設の工事が落成したときには，『解放』紙は号外を発行し，祝賀式や祝賀行事がおこなわれ，ほとんどいつも，ドリオが，完成した事業の重要性を強調するスピーチをおこなった。ドリオがしだいに市の事業と緊密に一体化するにつれて，市民のあいだで高まる尊敬の念と賛辞が向けられたのは，共産党にたいしてよりも，かれにたいしてであった。

1934年4月には，「貧困と戦争に反対する女性連合」の地方支部が推進して「ジャック・ドリオ・グループ」と名付けられた子供のグループがつくられた。1934年夏には，150人余りの子供たちがオーディエルヌ（ブルターニュの東端，フィニステール県の海水浴場のある漁港）の臨海学校に送られたが，『解放』紙はその臨海学校の大判の写真を掲載して，「独創的な体育訓練」と呼び，子供たちが「自発的に，砂浜にドリオの名を砂で形どって書いた」と報じている。1931年1月以来，ドリオが『解放』紙の論説を規則的に書いていたことをおもうならば，それはいわば「臆面もない」記事であったろう。また，同紙が頻繁にかれの写真を掲げたことを考えるならば，後年，「個人崇拝[138]」という表現を使ってこの時代のドリオが批判されたのも無理からぬことであった。

サン・ドニ市長時代，ドリオは体制派の「ブルジョワ」的著名人，たとえば（第1－3次）ラヴァル内閣の労働省政務次官モーリス・フーロンなどときわめて友好的な関係を維持した。1931年10月には，サン・ドニ市は働き口のない多数の労働者に，あらかじめかれらの状態について規則通りの厳しい検査をしないまま，失業手当を支給した。その結果，失業救済基金の調達に必要な助成金のいちじるしい増加を招いたが，労働省は，モーリス・フーロンの口利きで，拡大した予算の赤字の清算に積極的に協力し，こうしてドリオは困難を切り抜けることができた[139]。

ドリオが親しく接したのは，著名人だけではなかった。ドリオは「すべての市民を，かれらの意見がどうであろうと，市役所のかれの部屋に迎え入れ，親切に，そして協調的な態度を示そうと配慮しながら，かれらと接している。それに，かれの職務の必要から公衆の面前で発言しなければならないときには，意識的に抑制した言葉を使い，そこには共産党員の毒舌にいつもみられる非妥協的な態度をみつけるのはむずかしい」と1932年6月の警察報告[140]が強調している。

また，ドリオは，火の十字架団を含むすべての在郷軍人団体にたいして，市立の在郷軍人事

138) とりわけ，1945年以来サン・ドニ市長となったオーギュスト・ジョーが新聞*Saint-Denis-Républicain*の1964年7月24日号で使用した表現。

139) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, notes《Correspondance-14》du 21 février 1930 et《Correspondance Ⅹ》du 27 octobre 1931.

140) *Archives de la préfecture de police de Paris*, dossier 8310-2, note《Correspondance-11》du 7 juin 1932.

務所の設立に協力してくれるよう提案している。さらに，かれはサン・ドニ市の司祭とも親しく交際したので，社会党機関紙『ル・ポピュレール』は，司祭服をまとったドリオを素描した漫画を掲載して，それを風刺し，市民たちの笑いを誘った。しかし，ドリオが白系ロシア人の団体のパーティのために市役所のホールの提供を決めたときには，おそらく共産党政治局は心おだやかではなかったであろう[141]。

私生活では，かつての修道僧のような厳しさはすっかり影をひそめた。警察報告によれば，1932年以後，ドリオがパリで夜の時間を楽しむことが多くなり，パリ警視庁の刑事たちが，かれの行動を見逃すまいとして，かれを尾行している[142]。1926年以来，フランス共産党中央委員会のメンバーのひとりであり，パリ20区の質素な住居に妻と2人の幼い娘と一緒に住んでいた禁欲的なドリオを知っていたアルベール・ヴァサールも，ドリオのこのような変化に気づいていて，1930年にはまだ，ドリオは，サン・ドニの市会議員選挙戦を成功させるために，「市役所の物置小屋のようなところで簡易ベッドで寝起きしていた」が，その後は，「古くからの市の役人たちと連れだって，浮かれた生活を送るようになった」と証言している[143]。

ドリオがとくに好んでいた高級ぶどう酒の飲み過ぎは，いつかは，かれの身体的外観に影響せずにはおかなかった。1923 − 1925年頃には，バルベに「狂信的なボルシェヴィキの修道僧」のような印象をあたえていたドリオは，体格はがっしりしていたけれども，やせていた。しかし，1931 − 1932年以後，かれは急速に太り，身長180センチで100キロ近い体重があり，1930年代半ば頃には，肥満症の入口にまできていた。友人たちが「大男ジャック」と親しく呼んでいた人物は，いまや「太っちょ」とあだ名されるほどになっていた。

ドリオのサン・ドニへの定着は，かれの国会活動を新しい方向に向けさせた。1930 − 1931年には，まだ，かれは植民地問題と外交政策のスペシャリストであった。1931年2月13日，かれは，植民地予算の審議のなかで発言し，インドネシアで猛威をふるう弾圧と「恐怖政治」を告発している。「インドネシアにおける1年間の恐怖政治と革命的たたかい」という題の下に共産党によって公表されることになるこの演説[144]で，ドリオは，フランスの労働者階級に，「アンナン人プロレタリアートを支援するために，インドネシアの恐怖政治に反対して」立ちあがるよう呼びかけ，演説の最後には，社会党（SFIO）の植民地政策を攻撃している。その数か月後，ドリオは，マルティらとともに，1931年5月に開催された植民地博覧会にたいする共産党の反対キャンペーンを指導している。

また，1930年11月13日には，ドリオは，1914 − 1918年の大戦後のドイツの賠償問題解決のためにドーズ案を修正して採択されたヤング案[145]に反対する演説をおこなっている。それは，共産党代議士として外交政策にかんしてかれがおこなった最後の演説となった（この演説も，キャシャンの演説とともに，「ソヴィエト連邦を防衛し，悲惨な隷属と戦争のプラン，ヤング案に反対する」と題したパンフレット[146]として共産党によって公表された）が，

[141] *Ibid.*; *Le Populaire*, 26 février 1933; *Archives Nationales*, F^7 13131, note du 2 mars 1933.

[142] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-2, note《PP, 30 mars 1932》.

[143] A. Vassart, *op. cit.*, pp.412-413; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme , op. cit.*, p.131.

[144] *Un an de terreur et de lutte révolutionnaire en Indochine*, descours de J. Doriot et A. Marty, Bureau d'éditions, Paris, 48p.

[145] 賠償額の軽減や年賦支払方式を定めたヤング案は，1930年1月に第2回ハーグ会議で正式決定された。世界恐慌勃発後のことであった。

[146] *Pour la défense de l'Union soviétique. Contre le plan Young, plan d'esclavage de misère et guerre*, discours prononcés à la Chambre des députés par Marcel Cachin le 6 novembre 1930 et par Jacques Doriot le 13 novembre 1930, Bureau d'éditions, Paris, 1930.

ドリオは，そのなかで，ヤング案を「最初の年から，事実によってもっとも手厳しい否認を食らうユートピア的幻想」であるとして告発した。広範囲な新聞資料ととりわけドイツのライヒスバンク総裁シャハトがアメリカの雑誌に寄稿した論説にもとづいて，ドリオは，いかに賠償の支払いがドイツを苦境に追いやるかをあきらかにしている。ヤング案は，かれの目には，「それが巻き起こす災禍によって，それが生み出す貧窮によって，犯罪に近いユートピア」とうつったのであり，事実，その後，同案は世界恐慌により実行不能となった。

サン・ドニ市長に選出後，ドリオは演説内容を外交，植民地問題から社会政策に振り向けたが，それは世界恐慌の到来と時間的に一致していた。この時期，かれが恐慌の犠牲者のために国会演壇でおこなった多数の演説のなかで，共産党は2つの演説をパンフレットとして公表している。そのひとつは失業対策を論じたものであり，もうひとつは7時間労働を主張したものである。

1931年11月20日におこなった最初の演説[147]では，ドリオは，「失業と恐慌はもっぱら生産体制，すなわち資本主義制度の結果である」と主張し，全国には90万人近い完全失業者と300万人以上の部分失業者が数えられる（この時代のフランスの失業者数についてあたえられる唯一の継続したデータは「失業手当受給者」数であり，それにくらべれば，ドリオのあげる数字は誇大であると考えられるが，しかし，「失業手当受給者」は「失業者」のおそらくもっともせまい解釈に対応するものであり，失業者の実数はこれよりはるかに多かったであろう）として，恐慌を利用して賃金引下げをおこなおうとしている経営者たちの動きを告発し，政府と企業にたいして多くの措置——経営者と政府の費用での失業保険，賃金引下げを伴わない週40時間労働，恐慌以前から政府によって提案されている全国生産設備改善計画の拡充，学校，病院，救済院，交通機関，下水工事，低家賃住宅の建設等の公共事業など——の採用を要求している。そして，かれは「これらの計画が引出しのなかに眠っているのは，なぜか。それに必要な数十億フランをこれらの“生”の事業のために費やすのを望まず，“死”の事業，すなわち軍需予算に蕩尽するほうがよいとおもっているからである」と強調している。これらにくわえて，ドリオは，全国失業基金の設立（全国の3万7,000の市町村のうち，失業基金を所有していたのは1,140にすぎなかった）や失業者にたいする税と家賃の免除措置を提案し，失業者に失業手当が支給される180日の期限の廃止を要求したのである。

また，ドリオは「いくつかの官僚的措置の撤廃」を提案している。とくに，失業手当の支給には，失業者が同一県に6か月以上住んでいることの証明書が必要であったが，その証明の廃止を要求している。食品工業では，労働者は多くの場合食糧と住宅を供与されていて，解雇された場合，家族と離れても同じ県に住みつづけなければ，失業手当を受けとれなかったが，ドリオは，このような失業の管理規則をもっと柔軟に，もっと非官僚的に修正するよう要求している。当時，失業の責任を外国人労働者に押しつける傾向があったが，ドリオはかれらもフランス人労働者と同一の権利を享受すべきだと主張している。そして，外国人労働者の雇用を全雇用数の10パーセント以下に制限し，職を失ったり，正規の身分証明書をもたない外国人労働者を帰国させようとする法案を提出した社会党（SFIO）を非難して，「われわれにとっては，“外国人”という言葉は意味をもたない。かれらがわが国の資本主義の被搾取者であるときには，なおさらそうだ」と強調したのである。

147) *Les communistes et le chômage*, discours de Jacques Doriot à la Chambre des députés le 20 novembre 1931, Bureau d'éditions, Paris, 1932.

さらに，ドリオは1932年3月10日の下院では，「8時間労働と同一賃金での7時間労働[148]」を要求した演説をおこない，そのなかで，つぎのように主張している。資本主義的合理化は，たんに金融的，技術的集中においてだけでなく，プロレタリアたちからもっとも高い利潤を引き出すために，かれらをその肉体的能力の最大限にまで利用することにおいても進められている。経営者は，合法的に定められた8時間労働，いや，しばしば8時間を超える労働のあいだに労働者にたいしていっそう集中的でつらい労働を要求し，その結果，労働災害の急速な増加を引き起こしてきた。労働災害をふせぐには，まず，共産党と統一労働総同盟（CGTU）が勧告している制度，「衛生と安全を管理するための，労働者が選出し，また罷免できる工場代表の制度」を採用すべきである。そして，もっと根本的には，1日の労働時間を8時間から7時間に短縮することによって，労働者の労働を軽減しなければならない。この措置は，同時に，増加しつつある失業を減らすことにも貢献するであろう。このように主張したあと，ドリオは週40時間労働，年間3週間の有給休暇と育児休暇をすべて賃金の引下げなしに採用することを要求したのである。これらの措置が適用されれば，失業は「大幅に」減少するであろう，とかれはのべている[149]。

共産党の正統的立場や党規律からみて，この時期のドリオの公的な姿勢を「日和見主義」とみなすことはできない。このことを示す顕著な例として，1932年1月29日の反社会党示威行動があげられよう。この日の夕べ，社会党（SFIO）はジャピー体育館（パリ11区）で開催される集会にパリ市民たちを招いていた。これにたいして，共産党は，社会党の演説家たちに反論するためにドリオを送ることに決定した。共産党には，ドリオ以外に，党員たちを熱狂させ，社会党との討論に勝利できるものはいないかのようであった。

社会党（SFIO）は，体育館への入場は同党と労働総同盟（CGT）の許可証持参者に限ると予告していた。同日夕方，会場周辺で乱闘が発生し，ドリオのまわりに集まった共産党員たちは，「インターナショナル」を歌い，「ソヴィエト万歳」と叫びながら，ラ・グランジュ・オー・ベル街（パリ10区）の共産党系の統一労働総同盟（CGTU）本部での「大衆集会」への参加を呼びかけた数千枚のびらを配布し，警官隊と激しく衝突した。統一労働総同盟（CGTU）の満員になったホールでは，ジャピー体育館にはいれなかった数名の社会党員が共産党員と合流しただけであったが，ドリオは社会党員の労働者に向けた社会党批判の演説をおこなった。共産党がこのときのドリオの演説を公表したパンフレット[150]には，「会場の雰囲気は熱烈かつ友好的であり，社会党員の労働者たちは最高に熱狂的であった」と書かれていた。

このときの演説で，ドリオは「社会党（SFIO）の醜悪な態度を批判し，ホール全体の拍手喝采を浴びるなかで，かれは，ジャピー体育館で実現されなかった統一戦線がついにラ・グランジュ・オー・ベルで社会党指導者たちの意志に反して，さらにポリ公たちの意志に反して，実現されたことを証明した。われわれは社会党員の労働者たちにこぶしを突きつけるなどけっしてせず，反対に，友好の手を差しのべているのである」と共産党発行のパンフレットは書いている。共産党執行部にとっては，「社会党員の善き労働者」とは，かれらの党の指導者たちの見解を否認し，共産党の立場に合流する者であり，「統一戦線」とは「社会党という家禽の羽

[148] *Journée de sept heures avec salaire de huit heures*, discours de Jacques Doriot à la Chambre des députés le 10 mars 1932.

[149] D. Wolf, *op. cit*., pp.85-86, 平瀬・吉田訳, p.92; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.135-137.

[150] *Tu veux la paix, ouvrier socialiste?* discours de Jacques Doriot salle de la Grange-aux-Belles, le 29 janvier 1932.

根をむしりとる」ことであった。しかし，実際には，当時，コミンテルンの指令によって強制された極左セクト主義に陥って，羽根を失っていたのは，むしろ共産党であった。

1934年2月まで，社会党（SFIO）にたいするドリオの態度は，正確に共産党の教義を反映するものであった。その例として，かれが1933年4月22日に「アヴィニョン大会」と題して『解放』紙に公表した論説をあげることができよう。アヴィニョンで，社会党（SFIO）の臨時大会が開催された直後のことであった。ドリオは，同論説のなかで，この大会で，1932年5月の総選挙の結果成立した急進党内閣と「ブルジョワジー」を支持する社会党（SFIO）の方針がなんら変更されなかったことを確認して，共産党員に課せられた仕事，真正な，しかし，まだ道に迷っているプロレタリアである「社会党員の労働者たち」を，「完全に階級協調の泥沼にはまり込んだ」かれらの党から切り離そうという仕事を一貫して追求している[151]。

この時期のドリオの公的な行動にも，かれが公に書いた文章にも，共産党の規律に違反する行為とみなすべきものはなにもなかったが，しかし，すくなくとも1932年5月の総選挙の後では，党上層部のなかでかれがとった態度は，かならずしもそうとはいえなかった。選挙前夜には，ドリオは，『解放』紙に発表した「階級対階級」と題した論説で，共産党のスローガンをまったく正統的な仕方で表現し，「階級対階級連合，われわれのスローガンと組織についての統一戦線，これこそがわれわれの選挙戦のもっとも重要な目的であり，これこそがわが党の選挙の勝利を保証し，ブルジョワジーにたいするプロレタリアートの革命的勝利を準備するのである[152]」という熱意を込めた文章で論説を締めくくっていた。しかし，現実には，総選挙は共産党の惨敗に終わった。

革命をめざす政党にとっても，選挙は党の状況を示す物差しの価値をもっていた。「階級対階級」戦術にたいする不同意の表明を飲み込み，党の上層部への復帰の機会をねらっていたドリオは，総選挙の結果によって，かれの予想が立証され，かれの主張の確証がえられたとおもった。選挙の結果，共産党は大きく後退し，キャシャン，マルティ，デュクロを含む多くの上級幹部は国会の議席を失った。ドリオは，前回の1928年の選挙の結果を2,200票上回る票を獲得して，第1回投票で当選を決めたただひとりの共産党候補であった[153]。共産党の立ち直りはその政治方針の変更に依存しているという確信を抱くようになったドリオは，警察報告によれば，1932年5月12日に開かれた党の政治局の会議において，コミンテルンによって課せられた「階級対階級」戦術を「愚かで非常識な戦術」と表現して，その硬直性に激しく反対し，ドリオの発言で会議は大騒ぎとなり，トレーズは「このあらたな日和見主義的偏向」を厳しく非難して，政治局メンバーの大部分は，一致して，ドリオが「いずれ変節漢の一味に加わるだろう」と考えたという[154]。

ドリオは，国会議員総選挙の惨敗をもたらした党の状況をそんなに長くコミンテルンが放置しておくはずがないと判断し，かつてバルベ・セロール・グループを排除したと同様に，トレーズとデュクロがリードしている執行部を一掃するために早晩コミンテルンの介入があるだ

[151] のちになって，「ドリオは，社会党と共産党との関係を兄弟殺しの対立にまで導くためにもっとも熱心に行動した人物のひとりであった」と主張されるようになるのは，このときのかれの態度を根拠にしてである。Fernand Grenier, *Ce bonheur-là*, Editions sociales, Paris, 1974, p.208. しかし，それは「裏切り者」を中傷するまったくスターリン的なやり方であろう。J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme , op. cit*., pp.139, 514-515.

[152] *L'Emancipation*, 30 avril 1932.

[153] *L'Humanité*, 2 mai 1932; *L'Emancipation*, 7 mai 1932; J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge, 1890-1939,op. cit*., pp.280, 365.

[154] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-2, pièce《PP, le 13 mai 1932》.

ろうことを期待して，執行部に席を占めつづけたのであろう。選挙での勝利に力をえて，1932年8月27日－9月15日のコミンテルン執行委員会総会に出席したかれは，この方向に確かな一歩を踏み出すことができたとおもった。一方，ソ連共産党は，選挙でフランス共産党が総崩れになったなかで，なぜサン・ドニだけが共産党の勝利をもたらしたのか，サン・ドニにおける共産党定着の強化の原因はどこにあるのかを知ろうとした。ドリオはフランス共産党の厳しい現実を語り，その責任をコミンテルンの「正しい」方針を適用したさいの党のセクト主義に帰した。かれは選挙におけるかれ自身の成功を強調し，サン・ドニでの勝利はパリ地域全体の党にとって幸先よい前兆であると明言して，フランス共産党指導部にたいするコミンテルンの支援の必要を力説した。そして，ドリオは，コミンテルン執行委員会に「下部での統一戦術」を「トップ」に向けた協定の提案によって「補って完全にする」よう提案し，自分がフランス共産党執行部に勝ったと信じて，モスクワから帰ってきた。

しかし，コミンテルンはかれの期待通りには動かなかった。「12日以上モスクワにとどまったトレーズは，失った地歩の一部を取り戻すことに成功し」（アニー・クリージェル[155]），ドリオが予想したのとはきわめて違った指令をもって帰国してきた。その指令とは，とくにパリ地域については「ドリオだけに党の再建を託すのは論外である。確認された弱点と犯された誤りの主要な原因は中央集権主義であり，したがって，とるべき打開策は地方分権化である。党書記局は，旧パリ地域に5つの新しい地域をつくることによって地方分権化に責任をもつべきであり，新しい5つの地域はそれぞれ政治局あるいは中央委員会のひとりのメンバーの指導下に置くべきであり，ドリオはパリ北部地域だけを指導すべきである[156]」というものであった。おそらく，ドリオにたいするコミンテルンの警戒心がこのような決定の原因であったろう。ドリオのスピーチからはかれ自身の利益を優先させようとする気持がうかがえ，また，コミンテルンにたいして勝負を挑むような態度がみられ，そのことがかれをあまり信用できない人物とみせ，フランス共産党指導部内の均衡を覆すという代価を払っても，かれに党員数の3分の1が集中する地域の責任を任せることはできないと判断されたのであろう。それに，コミンテルンの指導者が「パリ地域の地方分権化の必要」を自覚したのが，ドリオの帰国後であったという事実自体が，この指令の作成がなによりもドリオの提案に反対するためであったことを示していよう。

この頃には，ドリオは党執行部がかれを避けようとし，コミンテルンがかれのような意見をはっきりいう人物よりも，その決定のすべてを受け入れるトレーズのように，順応的で，盲目的に服従する人物のほうを好んでいると感じはじめていたにちがいない。しかし，かれは，ドイツ共産党に押しつけられたセクト主義とドイツにおける左翼勢力の分裂がナチスの政権掌握に大きな役割を演じたと考えていただけに，その後も，社会党（SFIO）首脳部との協定の提案を繰り返すという危険を冒すことをためらわなかった。

ドイツにおけるヒトラー独裁の確立とドイツ共産党の崩壊は，コミンテルンの歴史にとってももっとも重大な敗北を意味していた。フランス共産党内でも，混乱と疑惑が広がっていた。ドリオにとっては，ドイツの事件はかれの判断を強固にするばかりであった。1933年11月28日－12月13日には，コミンテルン第13回執行委員会総会が開催されたが，ドリオは招かれ

[155] Annie Kriegel, *Les Communistes français*, Editions du Seuil, collection P, 1968, p.154.

[156] *L'Humanité*, 31 octobre 1932; A. Vassart, *op. cit.*, pp.330, 368; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.140-141.

なかった。おそらく，コミンテルンの戦術にたいしてかれが抱いた「疑惑」がその理由であったろう。しかし，ドリオは，この総会に出席するためにモスクワに出発しようとしていたフランス共産党代表団に，コミンテルンの戦術の柔軟化の問題を提起し，回答をえたいという意志を表明した「コミンテルン宛ての手紙[157]」を手渡した。これにたいして，コミンテルン執行委員会総会は「階級対階級」戦術を再確認し，プロレタリア革命によってしか世界的な恐慌と政治危機から抜け出す道はないと繰り返した。ドリオの名はあげられなかったが，かれの提案は「日和見主義」と呼ばれ，拒否された。1934年1月23－25日のフランス共産党中央委員会で，ドリオはかれの見解を表明し，戦術変更の必要を主張した。これにたいして，ドリオの見解は「敵の圧力の前に狼狽する」活動家の見解であり，かれの主張は「社会民主主義への降伏にいきつく」（トレーズ）と批判された[158]。

この政治方針にかんする論争は，人間的対立を伴っていた。ドリオはトレーズとデュクロを嫌っていた。先にみたように，ドリオは，自己批判を強いられた1929年3－4月のサン・ドニでの党大会に合わせてかれをしつこく誹謗しつづけたデュクロの態度を許せなかった。トレーズにかんしては，ドリオは，その性格と人間性の欠陥，その卑屈さ，臆病さのためにトレーズを軽蔑していた。反対に，トレーズは，下部党員たちのあいだでのかれの人気がドリオの人気によって凌駕されるのが耐えられなかった。ドリオはいつもすべてのデモの先頭に立っていたが，トレーズはデモのさいには姿をみせようとはしなかった[159]。

しかしながら，この時点でも，なお，ドリオは党規律に背こうとはしなかった。1933年6月4－6日にパリのプレイエル会館で開催された反戦集会のときには，1933年3月に急進党を離党したギャストン・ベルジュリーが提唱する「共同戦線」に反対する任務をあたえられたのは，ドリオであった。

プレイエル会館での反戦集会の9か月余りまえの1932年8月末，ロマン・ロランとアンリ・バルビュスのイニシャティヴによって，共産党の支持をえて，アムステルダムで「帝国主義戦争に反対する国際大会」が開催され，2,200人の代表を集め，そのうちの830人は共産党員，291人は――社会主義インターナショナルの禁止指令にもかかわらず――社会党員（そのなかには20人ばかりのフランス社会党SFIOのメンバーが数えられた）であり，ほかに多かれ少なかれ共産主義に近い多数の平和主義知識人が参加していた。大会の結果，「帝国主義戦争反対闘争世界委員会」が結成され，同委員会は，1933年6月，パリのプレイエル会館で反戦集会を開催したあと，アンリ・バルビュスによってパリで開始された反ファシズム運動に合流した。いわゆるアムステルダム＝プレイエル運動である。一方，1933年3月には，1928年以来下院議員であり，急進党左派から転向した著名人であったギャストン・ベルジュリーが，社会党（SFIO）下院議員のジョルジュ・モネ，コレージュ・ド・フランス教授のポール・ランジュヴァンらの協力をえて，急進党から共産党までの左翼諸政党・諸団体の結集を目標にした「共同戦線」を結成し，プレイエル会館での反戦集会の機会に，それを拡大することを目論んでいたのである。

しかし，ベルジュリーの「共同戦線」は，共産党にとっては，同党が主張する「下部での統一戦線」の原則を大きく歪曲した許しがたい主張であった。このため共産党執行部は，「共同戦線」によって組織された多数の集会で，いん

[157] 《Lettre de Jacques Doriot à l'Internationale communiste》, *L'Emancipation*, 22 mai 1934.

[158] J. Degras ed., *The Communist International 1919-1943*, *op. cit*., Ⅲ, p.313; D. Wolf, *op. cit*., pp.95-97, 平瀬・吉田訳, pp.100-103; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.141.

[159] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièces des 5 avril et 26 juin 1933.

ぎんに，しかし断固として，反対論を唱えたのであり，プレイエル会館では，「共同戦線」に反対する任務をドリオに負わせたのであった。ドリオは，アルベール・ヴァサールの表現によれば，「確信をもってではないとしても，規律に従って[160]」その任務を果たしたのであり，かれの態度は『ボルシェヴィズム手帖』のなかでデュクロの賞賛を受けたほどであった[161]。規律を遵守したドリオの行動の結果，1934 年まで，かれは共産党の要職（国会議員団，共産党自治体連合議長，1933 年 6 月からは中央統制委員会書記）を失うことはなかった。

[160] A. Vassart, *op. cit*., p.393; D. Wolf, *op. cit*., pp.92-93，平瀬・吉田訳, pp.98-99; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.142.

[161] *Cahiers du bolchevisme*, 15 juin 1933.

Dérive fasciste.
Jacques Doriot et le Parti populaire français. 2

Yukiharu Takeoka

L'histoire politique de la France des années 1930 était marquée par l'opposition violente entre la gauche et la droite. Dans cette situation, il existait un certain nombre des hommes qui sont passés de la gauche à la droite et dont l'exemple le plus représentant était sans doute Jacques Doriot. Doriot, qui occupait au début des années 1930 une place importante au sein du Parti communiste, se retrouva à peine dix ans plus tard parmi les partisans les plus actifs de l'ordre nouveau hitlérien. Comment expliquer qu'il soit amené, d'une gauche extrêmement active qui était, dès 1934, un pionnier de l'antifascisme, à la collaboration avec Hitler?

Pour Zeev Sternhell, historien israélite, la révision du marxisme est l'explication clé qui pourra faire comprendre le glissement des hommes de gauche vers la fascisme. Mais cette démonstration de Sternhell ne peut s'appliquer au cas de Doriot. Dans cet article, nous nous sommes efforcés de préciser historiquement ses itinéraires du communisme au fascisme et de montrer les conditions qui susciteraient un tel passage.

Classification JEL: N44
Mots-clés: Doriot, communisme, fascisme